
バニラ

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バナラ

【Nコード】

N1189B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

家庭環境から来るストレスによって、高校2年生の安二崎成美は、中学生の時からリストカットをしている。ある朝目覚めると、布団の中に飲んだ覚えの無い烏龍茶のペットボトルが・・・？それ以来、朝起きると時折身に覚えの無いモノが・・・服用している向精神薬の副作用による健忘か？夢遊病？それとも、解離性多重人格性の発病か・・・？彼女の身に起こる不思議な出来事。しかし、その不思議な出来事によって彼女は立ち直っていく。リストカット、オーバードーズ、失恋、監禁・・・女子高生、成美のちよっぴり不思議

議で切ない二重奏。

【第1話】（前書き）

小説を書く場合、特にジャンルを意識しないので「その他」として
いますが、青春ファンタジーな作品だと思います。

【第1話】

月の無い夜だった。

東京の夜空は月が無くても真っ暗と言う事は無い。

煌々と照らし出される街の灯が、上空の大気に反射して夜空を明るくするのだ。その代償として、ほとんど星は見えない。

寺澤豊は、新宿落合に住んでいる友達の家帰り道、青梅街道を車で走っていた。

途中で右折して、石神井公園の横を通って大泉に向かう交差点を通り過ぎた時、ヘッドライトが人影を照らした。

「うわ！」

寺澤はあわててブレーキを踏んだ。

A B S が作動して、ペダルに激しいキックバックが伝わる。

そんなにスピードは出ていなかった為、車は僅かな距離で停止した。

ぶつかった音や衝撃は無かった。が、今見えたはずの人影がない。

寺澤は、急いでドアを開けると車の外へ出た。

少女が一人、車の前に倒れている。

自分は、轢いてはいないはずだ。

寺澤は少女の傍に近づいて、怪我の具合を見た。

何処かの高校の制服を着ているが、寺澤には、それが何処の学校

かは判らなかった。

こんな夜中に……

夜中の1時を過ぎていた。

「おい」

寺澤は、怪我をしている様子がないその少女の身体を、少しだけ揺すってみた。

ぐったりして、反応が無い。

病院へでも運べばよかったのだ。何か病気を抱えている為に倒れたのかもしれない。

しかし、寺澤は自分の車に乗せると、自宅へ連れて行っただけだった。

もう、あとおんの僅かで彼のアパートだったから仕方ないかもしれない。

いったんアパートの前に車を止めて、少女を抱かかえると自分の部屋へ運んで、ベッドの上に寝かせた。

車を駐車場へ入れないといけない為、寺澤は再び部屋を出ようとした。

「う、うん・・・」

小さなうめき声で、寺澤が振り返えると、少女は目をぱちくりとさせながらベッドの上で起き上がっていた。

「ああ、良かった。目が覚めたのか」

寺澤は、ホッとしたようにベッドへ近づいた。

「あなた、誰？ここは、何処？」

「ああ、キミ、いきなり車の前に飛び出したんだ」

「あたし、車に轢かれたの？」

「いや、轢いちゃいないけど、何でか気を失って倒れたんだ」

「それで、さらって来たのね」

少女は少し身を引くように言った。

「いや、さらって来た訳じゃないよ。道路に放って置くのもなんだろう」

寺澤は、病院へ連れて行けばよかったのかと、今更思いついた。

「あ、俺、寺澤豊って言うんだ。君は？」

「安二崎成美」

「よかったよ、気がついて。何処も何とも無い？」

成美と名乗った少女は、自分の身体を見回して「ええ、たぶん」

「じゃあ、家まで送ろうか」

「いい」

「は？」

彼女はベッドの布団に素早く潜り込んで「帰りたくない」

「いや、帰りたくないって・・・」

寺澤は思わず困惑して

「あのさあ、困るんだけど」

「もう寝る」

彼女は、布団をさらに頭まですっぽりと被ってしまった。

寺澤はそれを見て、しばし啞然とした。

「キミ、家出？」

寺澤は布団を剥ぎ取るべきか迷っていた。

すると、突然今度は

「喉かわいた」

成美が布団を被ったまま言った。

「は？」

「喉かわいた。飲み物ある？」

成美はガバツと、布団をまくって起き上がった。

何て図々しい・・・最近の娘はこんなもんなのか。

寺澤は仕方なく、キッチンの冷蔵庫から烏龍茶を持って来て成美に渡した。

「とりあえず、俺、車移動してくるから」

なんだか変なのと関わりあってしまった。寺澤は正直、そう思いながら車を駐車場へ移動する為に外へ出た。

東京の明かりを反射した夜空は、月がなくても薄明るかったが、どんよりと敷き詰められた雲からは、細い雨が降り出していた。

寺澤が部屋へ戻ると、成美はすやすやと寝息を立てて寝ていた。

「マジか・・・」

彼女の顔を覗き込む。

少し茶色い髪、マスカラの着いた睫毛、ピンク色の唇。

寺澤は溜息をついて、ソファにゴロリと横になった。

【第2話】

目覚まし時計の電子音が鳴り響いていた。

赤色とオレンジのチェック柄の掛け布団を押し上げて、安二崎成美は起き上ると、目覚まし時計のアラームスイッチをOFFにした。カーテンの隙間から、細い光が部屋を照らしていた。

ベッドから出ようとした時に左手に何か硬いモノがあたって、彼女が視線を向けると、烏龍茶の500ミリのペットボトルが布団の中に転がっていた。

「何これ・・・」

成美はまったく覚えの無い烏龍茶のボトルを手にとって呟いた。

彼女は制服に着替えて1階のダイニングへ行き、髪の毛の寝癖もまだ直さずに一人で朝食のパンを口に入れながらコーヒーを飲んだ。

父親は大きな証券会社の幹部で、仕事が忙しいと言いながら殆ど家には帰って来ない。しかし、成美は知っていた。

自分の父親が若い女と付き合っている事も、世田谷にマンションを借りている事も。

母親は、表参道でブティックを経営していて、やはり家にいる時間が異常に少なかった。近々、代官山に二号店を出すらしい。

きつと母は、父にも、自分にもあまり会いたくないのだと彼女は思っていた。

成美は中学二年生の頃から、朝も夜も、ずっと一人で食事をしてきた。唯一友達と食べる昼ご飯が、彼女にとって少しだけ楽しかったりする。

非行に走ることは無かった。反抗期はあったが、それは、少ししか顔を会わせる事の無い両親には気が付かない程度のモノだった。

しかし、彼女にも両親には言えない秘密がある。

それは、既に初体験を済ませているとか、週に何度か彼氏の家でセックスをしているとか、そんな事ではない。

石神井公園のスグ横を通る道路沿いに成美の家はある。

高くて白い塀で囲われ、庭に敷かれた芝生は綺麗に刈り揃えられているような、割と大きい立派な見栄えの家だ。

レンガの敷かれた大きなガレージには、父親のベンツも母親のボルボも、たまにしか停まっている事が無い。

成美は何時もこの石神井公園の、草木の生い茂った柵沿いの道を通って駅へと向かう。

季節の移り変りを間近で感じられるこの公園は、今の生活で彼女が気に入っている唯一の情景だ。

「ねえねえ、聞いてよ、今朝起きたらさ、あたしの布団の中に烏龍茶のボトルがあっただんだよ。全然覚えが無いんだよね」

学校へ向かう電車の中で、友人の西村佳代に向かって成美が言った。毎朝彼女と一緒に言う訳ではないが、今日はたまたま同じ電車に乗り合わせた。

「寝る前に飲もうと思ってたんじゃないの」

浅い二重目蓋がコンプレックスの佳代は、今日もマスカラ2度塗りで登校する。

「あたし、普段あんまり烏龍茶、飲まないし」

「何それ。あんたもしかして夢遊病？」

佳代は小さな口を命一杯開けて笑った。

成美は少し膨れっ面を見せて、それでもつい一緒になって笑う。

「今度ケンジのバンドが横浜でライブやるんだって」

「へえー。凄いじゃん」

ケンジとは、プロを目指してバンド活動をしている佳代の男友達だ。

「そのうちデビューできるんじゃないの」

「なんかね、CD1枚や2枚くらい出しても、今の借金は消えないって言うってた」

「へえー。大変なんだね」

サラリーマンの臭いとOLの香水の香が入り混じった、咽るような朝の満員電車の中で、彼女達の話は尽きなかった。

外を通る小学生の元気な笑い声で、寺澤は目を覚ました。

見上げた天井は、何時もの天上では無かった。

いや、寺澤の部屋には違いないのだが、毎朝見る天上の位置とは違っていたので、一瞬そう感じたのだ

彼はしばらくの間、その天上を見上げていた。

「あっ」

どうしてソファに自分が寝ていたのか、昨晚の事を思い出して、

寺澤はソファから跳び起きた。

ベッドを見ると、そこに少女の姿は無かった。

布団が人型に膨れていたのが、寺澤はそれをはいで見たがやはり彼女はいなかった。

「帰ったんだな」

寺澤はそう呟いたで、やれやれと思った。

ベッドの上には、ほんのりとバニラのような甘い残り香が漂っていた。

【第3話】

日が暮れた頃、成美は帰宅して自分の部屋に入ると、よほどの事が無い限り、殆ど外には出ない。

パソコンを立ち上げて、毎日のように自分の共感できる世界へと、彼女は感覚を共鳴させる。

向性神薬系マニアが集うサイトだ。

母親が作った夕飯を温め直して食事をする。

日中、一度帰ってくる母が、前もって夕食の仕度をしていくのだ。店屋物の時もあるが、もう慣れ切った彼女にはどうでもいいことだった。

彼女は、不安と寂しさを打ち消すようにネットに嵌るうちに、薬系サイトに辿り着いた。

様々な向精神薬の薬効や、それを服用する様々な悩みと苦痛を抱えた人々に、成美は異常に興味を示した。

夜の11時過ぎ、成美はクローゼットから剃刀を取り出すと、インターネット掲示板に接続したまま、自分の白い足首にそれを当てた。

鉛色の刃が、蛍光灯の光に照らされて不気味に光り、それを眺めているだけで頭の奥から悪魔の囁きが聞こえてくる。

薄い皮と脂肪を突き抜けて、肉に入り込んだ辺りで、ゆっくりと刃を縦一文字に引く。

薄い剃刀の刃で切った肉は、すぐには血を流さない。

少しの時間差と共に傷口から赤い液体が滲んでくる。

傷口を指で摘むと、赤い水玉が膨れ上がり、やがて一定の大きさを越えると弾けるように足を伝って流れ落ち、同時に生臭い鉄の臭いがする。

成美は、植木鉢の受け皿に溜まった自分の血液をトイレに流す。

『今、私はリストカットをしています。気持ちイイです』

成美は掲示板に書き込みを入れた。

それに対する外の人達の反応など彼女には興味がなかった。

ただ遠くにいる知らない誰かに、この状況を伝えたいだけで、それに関する感想や慰めは求めていない。

ましてや中傷など眼中には無い。

どこかの誰かに、自分の孤独や迷いを知って欲しい。ただそれだけなのだ。

そして、エバミールの0.25g錠を四つ、午後の紅茶で喉に流し込んだ。

薬はネットで購入したものだった。

通院して処方されたものでは無いので、ネットの情報を元に、自分で適当に選択して飲むのだ。

彼女はそれを、オリジナル処方と呼んでいる。

精神安定剤を飲めば、足を切らなくなると思った。

しかし、薬を飲むという衝動が癖になっただけで、自傷行為は止まらなかった。

買い置き của ガーゼを取り出して傷口に当てて包帯を巻くと、途端に気持ちが楽になる。

以前、傷を付けずに包帯だけ巻いてみた事があるが、それは何の効果も無かった。

彼女自身にも、どうして自分の身体を切りたくなるのか判らなかった。ただ、切った跡に血が滲み滴る感覚が止められない。

傷をつけ、そこから滴る血液を見た時、彼女は自分が生きていると実感するのだ。

乾いた心を自分の血で潤すかのように・・・

そして、心の奥に潜む濁った鬱な精神を血液ごと体から排除するのだ。

それでも、目立つ手首を切らずに、足首を切るのは彼女に自尊心

が残っている証拠だろう。

傷口はそんなに深くは無い為、しばらくすると完全に塞がるが、かすかな傷跡は残る。

普段はソックスで隠れているが、成美の両足首には、そういった傷が無数に付いていて、必ずどちらかの足首には包帯が巻かれている。

それはまるで、自分の危うい心に自分で着ける足枷のようなものだ。

【第4話】

寺澤豊は25歳。アパレルメーカーに勤務している。

営業を2年経験して、今年、念願の企画部に配属になった。

アパレルメーカーと言っても、デザイナーズブランドを扱うわけでもなく、通常のカジュアルショップや、レディースショップに並ぶ、ごく大衆向けのメーカーだ。

自社のタグはあるが、誰も意識して見てはいないだろう。

去年、先輩の企画を手伝った際、色合わせの配色を寺澤が思案して、なかなかの人気商品になったのだ。

それを知った、企画部長が営業から引き抜いてくれたと言うわけだ。寺澤自身、デザインや企画がどうしてもやりたい訳ではない。ただ、重いサンプルバッグを持って、蟻のように都内中をぐるぐると歩き回る営業に比べたら、企画室は花形なのだ。

「寺澤くん。キャミのサンプル写真取りするって」

森口雪絵が廊下で声を掛けて来た。

彼女は寺澤よりも一つ年下だが、企画部に入ったのは、彼よりも一年早い為、寺澤は「くん」付けで呼ばれる。

小柄だがテキパキと歯切れ良く仕事をこなし、何よりも丸顔で童顔な笑顔が可愛い。と、取引先でも評判だった。

寺澤がサンプルを持ってオフィスへ来ると、幾つかのダンボールに今回の撮影用の衣類が入っていた。

「へえ、モデルって、本当に28インチとかなんだ」

箱の一つに入っていたボトムを手で広げる。

いきなり右手を誰かに叩かれた。

「いてっ」

「ちよっと、やらしい目で見ないでね」

雪絵が笑いながら冗談混じりで言った。

東京都内と言っても、練馬区の外れまで来ると、畑もあれば雑木林もある。

夜更けの住宅街は閑散とし、殆ど車も人も通らない。不動産屋はこれを、閑静な住宅街と言う。

駅からの帰り道、竹林の暗闇でうごめく影に一瞬身体を硬直させる。

月影の暗黒と静けさの中で、生きた何かが動いている。

人もまた、視覚で確認できないモノを気配で感じ取る事ができる。それが、かえって恐怖を与える事もあるのだ。

しかし、ガサゴソと出てきた物体が「にゃあ」と鳴いて、思わずホッとする。

会社から帰宅した寺澤は、シャワーを浴びていた。

彼のアパートはごく一般的な1Kの間取りで、玄関を入ると三畳ほどのキッチンが在り、冷蔵庫や洗濯機が並んでいる。

黒色で統一してはいるが、必要最小限の電化製品しか無い。

左にトイレ、右手側に浴室が在り、寺澤はバスとトイレが別になっている間取りが気に入っていた。

トイレと浴室の間に1メートルほどの短い廊下があり、ドアで仕切られた先が七・五畳の洋間が一つ、そこには生活の全てが収まっ
ていて、36インチの液晶ワイドテレビがやけに大きく見える。

バスタオルで身体を拭きながら部屋の仕切りドアを開けた寺澤は、あまりの驚きに呼吸が止まる思いだった。

「きゃっ」

「うわっ」

この前の少女、安二崎成美がいたのだ。

彼女はベッドに腰掛けたまま、両手で顔を覆っていた。

寺澤はトランクス一枚の姿だったのだ。

「何でいるんだよ」

彼は、あわてて部屋着を手に、キッチンへ戻った。

部屋着のスウェットを着ながら

「何処から入ったんだ？」

「さあ」

成美は少しふざけた調子で言った。

玄関のカギは帰宅時に閉めたはずだし、一階の部屋だと言っても、バルコニーを乗り越えて入ったとも考え難い。

「今日は何の用だい？」

寺澤は、自分はビール、成美には冷たいお茶のミニペットを渡した。

部屋に入ってしまったものは仕方が無い。別に自分を殺しに来たわけじゃないだろう。

「別に用ってわけじゃ無いわ」

「また家出とか？」

寺澤はそう言って缶ビールをゴクゴクと飲んだ。

「家出じゃないよ」

「でも、もう12時だぜ。それに、制服。家に帰ってないのか？」

「帰ったわよ。鞆持ってないじゃない」

成美もそう言ってお茶を飲んだ。

その時、一瞬彼女の身体が透き通ったように寺澤には見えて、ギョツとした。

「あははははっ」

成美は寺澤の部屋でテレビを観て笑っていた。

そのあまりにも無邪気な笑顔に、寺澤も文句が言い難い。

「あのなあ、用がないんなら帰ってくれない？」

「どうして？あなたもどうせ暇でしょ」

「俺は明日も仕事なの。学校と違って居眠りしてるわけには行かないんだぜ」

寺澤は、ビールをとくに飲み終えて、冷蔵庫から烏龍茶を取り出していた。

ふと、玄関に成美の靴が無い事に気付く。

「おい、キミ、靴は？」

と、部屋を覗いたとき、彼女の姿は既に無かった。

【第5話】

夜気の静けさが止んで、朝ぼらけの空気が辺りを包み、鳥がさえずり出す頃、人々の生活が目覚ます。

石神井公園の早朝は、ジョギングやお年よりの散歩で静かに賑わう。

彼女が目覚ますのは、その賑わいが一段落した頃だ。
散々鳴った目覚ましを止めて、布団の中でまどろみに浸る。

「何これ……」

成美はベッドから起き上がると、再び声を上げた。
布団の中に、またもやお茶のペットボトルが入っていたのだ。
今度は緑茶で、しかも3分の2ほど飲んだのである。

彼女は自分が寝ぼけて夜中に飲んだのか考えた。しかし、成美の家の冷蔵庫にはこのお茶の買い置きは無い。

まさか、寝ている間に駅前のコンビニまでわざわざ買いに行ったとも考え難い……

彼女は釈然としないまま、勢いよくカーテンを開けて窓から外を眺めた。

石神井公園の林から小鳥の群れが、一つの大きな固まりのように微妙に型を変えながら何処かへ飛び立って行くのが見えた。と、成美は思い出したように部屋を出て、トイレに駆け込んだ。

「ねえねえ、あたしさあ、今朝起きたらまたペットボトル掴んでたんだよ」

学校に着いた成美は、思わず今朝の出来事を友達に話した。
「成美、やばいんじゃない」

佳代が言った。今朝は同じ電車ではなかったのだ。

「あんだ、一回見てもらった方がいいんじゃない」

一緒に話を聞いていたクラスメイトの美鈴も眉を潜めてた。

二人の友人はどちらもお姉さんタイプだったが、佳代は姉御肌できびきびとして、少しだけキツイ印象もある。

156センチの成美に対して、157センチの佳代は「あたしの方が少し背が高い」とよく言っている。

美鈴はどちらかと言うと優しいお姉さんのような所があって、喋り方も柔らかい。

163センチの大人びた体型の割には、どこかおっとりとしていて、本人は急いでいるつもりでも周りにはそう映らない事がよくある。

成美は向性神薬を飲んでいる。

精神科に処方されたものではなく、ネットに溢れているものを購入しているのだ。

毎日広い家に一人していると、夜眠れない事が多くなり、ある時、インターネットのサイトで情報を掴んだ。

上手くいけば自傷行為もなくなるかもしれないと思ったが、それは叶わなかった。

彼女は自分が薬の副作用で夢遊病者のように夜中に徘徊しているのかも知れないと思うと、そんな訳は無いのだが、医者に見てもらう気にはなれなかった。

ハルシオンの副作用で健忘が上げられているのを知っていた彼女は、自分の中で余計な妄想が広がる恐怖を感じていた。

それでも常用を止められないのは、飲む事によってよく眠れる事と、一時的に精神が安定するからだ。

「成美、いるのか？」

夜、久しぶりに父の声を聞いた。

何日ぶりだとか、そんな事はいちいち数えていない。

成美は部屋のドアを少し開いて、父親と顔を合わせた。

「お父さん、明日から出張で一週間くらい、いないから」

「うん、判った」

それだけ言うと、成美はドアを閉めた。

（いつもいなくせに、いちいち言わなくていいんだよ。会社の出張なのに、一週間くらいって・・・くらいって何？どうせ、女と出かけるくせに・・・）

成美は右手に持った剃刀の刃を、何時もより深く、自分の左足首に食い込ませゆっくりと引いた。

切り口から白っぽい桃色の肉の断面が一瞬覗き、その瞬間に傷口の中の、切り裂かれた血管から赤い血液が溢れ出して、下に置いてあったファッション雑誌の開いたページにボタボタと滴り落ちた。

（もし友達に自傷行為の事を話したらなんて言うだろう。佳代はきつとあたしを叱るだろう。美鈴は優しく慰めてくれるだろうか。博明は・・・何も言わないかもしれない。面倒な女だと思うかもしれない）

そんな思いが時折彼女の心を過ぎる。

成美は呼吸の乱れを正す為に、ゆっくりと静かに深呼吸して、机の引出しから取り出したレキシタンを二錠口に放り込んでペットボトルの水で流し込んだ。

胸が苦しくなって、頭に血液が逆流しているような感覚。

過呼吸によって、血中の酸素濃度が上がりすぎるのだ。

不安発作・・・

それを押さえたいが為に足首を切る事がある。

頭に逆流していた血液が足首の流血によって正常に戻るような気がした。

呼吸が完全に整う頃、理由も無く涙が頬を伝う。

成美は再び机の引出しを開けてハルシオンを二錠取り出し、その

セイジブルーの美麗な錠剤を口に放り込んだ。

足首にガーゼを当てて包帯を巻くと、彼女は眠気に襲われないうちに窓の外の暗がりを見つめた。

公園内に灯る幾つもの街燈の小さな明かりが、少しだけ自分の心も照らしてくれそうな気がして、彼女は自分の部屋の窓から公園の景色を眺めるのが好きだった。

【第6話】

他社の展示会を見学に行った寺澤は、この日は直帰の為、何時もより早い時間に池袋駅にいた。

ついでのので、市場調査も兼ねて駅ビルのアパレルショップを一回りした後、地下の構内を歩いていた時、思わず目を凝らした。

「あれは……」

地下通路の交差した場所で、右方向から歩いて来た女子高生二人。池袋構内で女子高生など珍しくも無い。見渡せば山ほどうついている。しかし、その女子高生二人のうちの一人は、あの安二崎成美だった。

「よっ、学校はちゃんとしてるみたいだな」

寺澤は、近づいて成美の肩を軽く叩いて声をかけた。

「誰？」

隣にいた佳代が成美に訊く。

「知らないよ」

成美はただ驚いた顔を寺澤に向けている。

「ナンパ？」

佳代が言った。

「いや、俺、寺澤だよ」

寺澤は、成美が冗談を言っていると思った。

「知りません。行こ、佳代」

二人はそのまま歩き出した。

「ちょ、ちょと。なんだよ」

寺澤は追いかけるように成美の肩に触れた。

「ちよつと、触らないでください」

成美は寺澤の手を強く払い除けた。

「大声だしますよ」

隣の佳代が睨んだ。

その声で、周囲の目は既に寺澤を見ていた。
「行く」

二人の少女が足早に構内の人込みに消えて行くのを、寺澤は、ただ呆然と眺めていた。

* * * *

まどろみのような意識の中で真空をさ迷うような浮遊感覚に身を委ね、身体の中が溶け出して液化化していく。

全ての感覚神経が精神と融合し、そこに大脳と言う思考装置は働かない。

ただ α 波と β 波を出す快楽装置に過ぎないのだ。

そんな錯覚から目覚めた時、男の言葉は彼女が持つ全てのプライオリティーを破壊させる。

「俺さあ、今度、大山高校の娘と付き合う事にしたんだ」

博明は自分だけさつさとトランクスを履いて、ベッドの隅に腰掛けると、マルボロライトに火を着けながら言った。

「はあ？ 何それ・・・あたし、聞いてないし」

成美はベッドの上で身体を起こした。

彼の吐き出したタバコの煙が、中を舞って丸い蛍光灯の輪に纏わりついた。

「って言うか、今日決めた」

「じゃあ、何で今、エッチしたわけ？」

「いや、最後に一回ヤツテおこうって、そんなカンジ。でも、成美がよければこのまま続けるっていう手もあるし」

一重の涼しげな目線と、それでいて子供のようにキラキラした瞳。博明の眼差しにはまったく悪びれた影も無く、その言葉がどれだけ相手を傷つけるかも考えてはいない。

成美は、博明の部屋のベッド脇に在った目覚まし時計を、思い切り彼の頭目掛けて投げつけた。

「ふざけんな、バカ！」

「いつてえ」

頭を庇った右腕に目覚まし時計が命中し、蓋が外れて電池が飛び出し、カーペットの上にバラバラに転がった。

成美は、博明が脱がせて散らかした自分の衣服を拾い集めて部屋を飛び出した。

部屋を出る直前に、ドアの横に博明が大切だと言って飾っていたマラドーナのポスターを、彼女は思い切り引き裂いた。

オーバーヘッドキックをしているマラドーナの体が真つ二つに割れた。

「てめえ、何すんだよ。ざけんな」

「バカ、最低、死ね！」

成美は裸のまま階段を駆け下りて、玄関で衣服を適当に身に着けると、ブラウスのボタンを半分しか嵌めないまま外に飛び出した。

部屋から、何かを叫ぶ博明の声が聞こえたが、もう何を言っているのか彼女の耳には入らなかった。

【第7話】

日は完全に沈みきって、小さな街路灯だけが導く椎名町の住宅街を成美は駅に向かって歩いた。

道行く人はみんな、のつぺりとした黒い塊にしか見えなかった。ブラウスの残りのボタンを嵌めて、裾をスカートの中に入れたが、リボンを着ける気力が無かった。

博明は、今年の4月に池袋のカラオケボックスで知り合った、サッカーで有名な都立の高校に通う同じ年の少年だった。

自分を好きだと言ってくれる彼に、成美は身体を許した。

自分自身、彼を本当に好きだったのかは判らない。

自分を必要としてくれたし、狙ってる娘が多いと言う噂を聞いて、ちよつとだけ優越感も湧いた。

何よりも、肌を合わせている間は全ての孤独から開放された。

でも、それは、彼がただ単に、セックスした経験人数を増やしたかっただけなのだと、今さら気付いた自分が異常に腹立たしかった。メンバーズリストの一人に過ぎなかったのだ。

漠然と歩いて来た成美は、椎名町を通り越して何時の間にか、隣の東長崎の駅に来ていた。

気が付いた時にはもう、見慣れない駅の階段が目の前に見えて、到着した電車から降りた人の群れが溢れ出てきた。

「一駅分損した・・・」

成美は小さく呟いた。

定期を持っているので、どちらから乗っても一緒なのだ。

しかし、こんな時にそんな事を考える自分が、なんだか可笑しかった。

駅で電車を待つ少しの時間に、成美は携帯電話に入った、博明に関するメモリデータを全て消去し、メールアドレスと電話番号を着信拒否のデータに加えた。

彼から貰った、左腕に着けていたワールドカップ記念限定の、鮮やかなジャパンブルーのラバーブレス。

それを無造作に外してホームのゴミ箱に投げ捨てた。

（結局、あたしを本当に見てくれる人なんていないんだ・・・）

構内にアナウンスが流れ、電車が侵入して来るのが見えた。

混沌とした雑踏の中で、人々の視線は一斉に電車に向いた。

電車のライトがハイビームからロービームに切り替えられる。

（ここで飛び込んでも、誰も止める者はいないだろう・・・あの電車の運転手以外は、飛び込んだ事さえ気付いてくれないかも知れない）

成美の足はゆらゆらと力なく前方へ踏み出していた。

別に博明が許せないんじゃない。

優しさや温もりに餓えるあまり、優しい言葉の裏に隠れた男の欲望を見抜けなかった自分が許せない・・・

正面に見えるジーンズショップの大きな看板だけを、焦点の定まらない視線で見つめながら、盲人用のデコボコした黄色い線を彼女は跨いだ。

その時、誰かの手が自分の肩に触れた感触がして一瞬足が止まった。

まるでやかでほんのりと甘い香が微かに鼻孔に漂った気がした。

同時に携帯の着メロが鳴った。

その瞬間、大きな風切り音と共に先頭車両が彼女の鼻先を通過して、その風圧で成美は後へよろめき、髪は大きく踊った。

彼女が後を振り返えると、乗降位置からずれたその場所には、自分以外には誰もいなかった。

さつき一瞬香った甘い匂いの正体を探したが判らなかった。

何処かで嗅いだはずなのに思い出せない。

成美は、鳴り続ける携帯電話を手に取った。

「もしもし」

「あ、成美。明日さあ・・・」

佳代の声だった。

「今、電車だから。後で電話するよ」

切りかけた電話に向かって成美は

「あ、佳代・・・」

「なに？」

「ありがとう」

「はあ？」

成美は電話を切りながら、扉の開いた電車に、吸い込まれるように乗り込んだ。

成美が普段から持つ「孤独」という意識が限界点へと到達していたのだろう。

失恋くらいで電車に飛び込むとは思えなかった。

追い討ちをかけるような心の傷が、成美のタナトスを増幅させたのだ。

それは、誰もが心の奥底に隠し持つ、静かなる死の本能。

携帯電話を鞆に仕舞いながら、車窓から外を見ていた時、線路沿いのケーキ屋が目に入った。

「あの、匂い・・・」

彼女は思い出した。

あの甘くてまろやかな香は、家庭科の実習でケーキを作った時に使用したバニラエッセンスの香だと。

誰か近くの人がケーキが何かを持っていたのだろうか。

でも、誰かがケーキを持っていたとしても、あんなにハッキリしたバニラの香りがするだろうか・・・

成美は、同じ車両に東長崎駅から乗り込んだ乗客を見回した。しかし、ケーキらしき物は誰も持っていない。

この中に誰かパティシエでもいるだろうか。

彼女はそこで考えを止めた。

自分がさっき死のうとしたのかどうか、と言う事も含め。

成美は、暗闇の遠くに浮かび、通り過ぎてゆく幾つもの建物の明かりを、ただ無心で眺めていた。
空にはオレンジ色の月がやけに大きく浮かんでいた。

【第8話】

「起きてよ。ねえ」

寺澤は夜中に身体を揺すられて目を覚ました。頭の中はまだまどろみの中だ。

「なんだよ。夜中だぞ」

時計を見なくても、夜気の静けさから今が真夜中と言う事は、寺澤には判った。

「ねえ、お話しようよ」

成美は寺澤の身体を再び揺すった。

寺澤はここ二日ほど展示会の準備で忙しかった為、疲れていた。

「なんだよ、幽霊みたいにいきなり出たり消えたり」

寺澤は、まだ半分寝ぼけている。

「だって、幽霊だもん」

「ウソつけ。昼間見たぞ。シカトぶっこきやがって。って、なに人の布団に入ってたんだよ」

寺澤は布団を跳ね上げて起き上がった。

成美は寺澤の布団に入り込んで彼の身体を揺すっていたのだ。

「それは、たぶんあたしじゃないよ」

成美はベッドに横たわったまま言った。

「いや、絶対お前だった」

寺澤はベッドから降りて彼女を見下ろして言った。

「それ、あたしだけど、あたしじゃないんだよ」

「なんだ、それ？」

* * * * *

肌の感触、体温、息遣い。全てがあまりにも自然で、それを否定するには十分すぎた。

だったら彼女が飲み食いしたものは何処へ行ってしまうのだ。

媒体・・・そうか、彼女が媒体となつて本人の呼吸や体温を外に伝えるのだ。

逆に考えれば彼女が飲み食いしたものは、夜中に寝ているであろう本人の身体に入るのだ。

いやいや、そんなバカな・・・

そんな訳があるか・・・

霊媒や霊能者などみなインチキだと思っていた。

今まで心霊現象などと言うものには縁遠い寺澤には、どうしても理解出来なかった。

「なあ、雪絵」

昼休みの会社で、寺澤は森口雪絵に声をかけた。

「なに？」

「今夜飯でもどう？」

「あら、珍しい」

雪絵は笑って

「帰りまで考えておく」

と言った。

小柄で少し幼児体型の雪絵は他の部署の連中にも人気が在る。

何処かのショップ店長と付き合っていたらしいが、最近別れたらしいと言う噂は聞いていた。

それが、本当なら、晩飯くらい付き合ってくれるだろう。

下心が無い誘いだから、かえって自信がある。

久しぶりに定時とはいかないまでも、今日は6時半には退社出来た。

重宝がられる雪絵は少し雑用が残っていた為、仕方なく寺澤が手伝った。

「なんか、悪いね。ご飯おごって貰うのに、仕事まで手伝ってもらって」

雪絵は何故か寺澤に遠慮が無い。

食事の後、二人は居酒屋に入った。

「実は、雪絵に相談があるんだ」

注文した飲み物が運ばれて来て、雑談も一段落した時、寺澤は雪絵に向かって言った。

「なによ、妙に改まっちゃって」

雪絵は、少しだけ胸の奥がドキドキするのを感じた。

居酒屋の高い天上から吊るされた照明が、薄暗い店内で二人を照らしていた。

「おまえ、靈感強いって言ってなかったっけ？」

「はあ？・・・」

一瞬意味が判らず、雪絵は笑顔のまま固まっていた。

「ほら、社員旅行の時の旅館で、何か感じるって、唸ってたじゃないか」

「唸って無いわよ、失礼な」

いきなりの意表をついた話題に、雪絵はすっかり拍子抜けして、素敵な笑顔は消え去っていた。

「で、それがどうかしたの」

雪絵はりんごサワーを飲みながら、どうでもいい様に言った。

「実はな、俺の部屋に出るんだよ」

雪絵は、持っていたグラスを思わず落としそうになって、口に含んでいたサワーは外へ飛び出しそうになる。

それを、慌てて喉の奥へ大きく飲み込んだ。

「出るって？」

「女子高生が・・・」

「あははははは・・・」

雪絵は思い切り笑って「寺澤君、援交でも相手してんの？」
彼女は、おかしな冗談だと思って笑い飛ばすしかなかった。

【第9話】

「その娘、生霊らしいんだ……」

そのとたん、飲みかけたサワーのグラスが雪絵の手から抜け落ちて、テーブルの上に落下した。

まだ半分残っていたりんごサワーが、氷と一緒にテーブル一面に薄く流れた。

「あああつ」

雪絵は、慌てておしぼりを掴んで、真っ先に自分の膝に零れた液体を拭き取った。

「あんたが変な事言うから……もう」

寺澤も、テーブルの上にこぼれた氷を拾いながら、おしぼりで拭いた。離れたテーブルに座ったお客までが、何事かこちらを覗いている。

「冗談じゃないんだよ。マジで困ってるの」

「うそ。本当の話なの？」

雪絵は一瞬手が止まって、寺澤を凝視した。

「しかも、触れるんだ……」

「……やらしい……」

雪絵は目を細めた視線で寺澤に言った。

従業員が駆け寄ってきて、テーブルを拭いてくれた後、新しいおしぼりをくれた。

「何言ってるんだ。こっちは真面目に困ってるんだぞ」

「ゴメン、ゴメン。真面目に聞くよ」

寺澤は、最初に成美と出会った時からの事を一通り話した。

雪絵は真剣に話を聞いていたが

「ふーん。生霊と添い寝ね……」

口元が笑っている。

「だから、そこはどうでもいいんだよ」

「はいはい」

雪絵は新しいおしぼりで、淡いエンジ色のミニスカートの沁みを丹念に拭きながら応えた。

「で、どう思う」

「どうって？」

「だから、どうして、その娘は俺に付きまとうんだと思う」

「うーん。寺澤君の事が、好きなんじゃない」

寺澤は、怒った顔をして、声に出そうとしたが、雪絵は話続けた。

「冗談じゃなく、幽霊に惚れられた話だってあるんだよ。それが、何かあなたに関係している事があるんじゃない」

「もともと見たことも無い娘だぞ」

「じゃあ、波長が合うのかも」

「波長？」

寺澤は、ラッキーストライクメンソールを一本取り出して、火をつけた。

「だって、靈感が強いとかって言うのも、霊波を沢山感じたり、波長の同調がし易い人だって、何かで読んだよ」

雪絵は、寺澤のタバコから出た煙が自分の方へ来ないように、手で仰ぎながら言った。

「だいたい、本当にその娘は生霊なの？」

「本人がそう言ってたよ」

「息遣いも、体温もあるのに？」

雪絵の言葉に、寺澤も一瞬黙るが

「そんな事、俺がし知るか」

「寺澤君、何か別のものに獲り付かれたんじゃないの？」

雪絵は少し、心配そうな顔をした。

寺澤は溜息をつきながら、雪絵に掛からないように横を向いてタバコの煙を吐き出した。

夜更けの住宅街に二人の足音が響いていた。

半分に欠けた月が、ゆつくりと流れる雲に見え隠れしている。

「っていうか、本当にウチ来るの？」

雪絵は、寺澤の家に現れる少女をひと目見ようと、一緒に西武線に乗って大泉学園の駅で降りた。

「だって、見てみない事には何とも言えないでしょ」

雪絵は少し張り切ったような笑顔で言った。

南口の階段を下りて、パチンコ店の在る右側の路地に入り、住宅街を15分ほど歩くと寺澤のアパートが在った。

「駅から遠いのね」

「駅周辺は家賃が高いんだよ」

駅の階段を降りたときには数え切れないほどの人が周りにいた筈なのに、チリジリに住宅街へ消えていくと、自分達の前後には殆ど誰もいなくなる。

夜の9時を過ぎるとなおさらの事だった。

「烏龍茶しか無いけど、いいだろ」

寺澤は、雪絵を部屋に上げると、冷蔵庫から烏龍茶の小さなペットボトルを取り出してテーブルの上に置いた。

「何にも無いのね・・・」

ソファに腰掛けた雪絵が、部屋を見渡して言った。

彼女は、出された烏龍茶のボトルのキャップを小気味良い音を立てて開けると、一口飲んだ。

「彼女が現れるのは、遅い時間だよ。大丈夫かい」

「帰りは送って行つてね」

雪絵は、初めから帰りは寺澤に送ってもらうつもりでいたらしい。「毎日現れるわけでもないし」

「いいわ、別に。帰っても何時も暇だし」
彼女は楽しげに笑って、そう言った。

二人は時間つぶしに、DVDで映画を見ていた。

何も無い彼の部屋にも映画のDVDはラックにビッシリと並んでいる。100本は在るだろうか。

「まるで、レンタル屋さんね」

雪絵はそう言いながら、ラックを眺めて

「あ、これ、面白いのよね」

そう言って、スパイアクションものの映画を一つ取り出した。

クライマックスのアクションシーンに入っていた雪絵が、フツと後を振り返った。

背中に何か、気配を感じたのだ。

「それ」を見た雪絵は、ソファの下に座る寺澤の肩を、思わず強く叩いた。

【第10話】

寺澤は、もう慣れていたので、まったく驚かなかった。

成美がベッドの上に静かに座っていた。

「成美ちゃん？」

雪絵は母親のように優しく話し掛けると、成美は小さく頷いて

「あんた、誰？」

雪絵に向かって訊いた。

「あたしは、森口雪絵」

「豊の彼女？」

「ち、違うけど」

雪絵は少し慌てて応えて「どうしてここに来るの？」

と、話続けて訊いた。

「心地いいから・・・」

今日の成美の服装は、パジャマだった。

ダークブルーの生地に、微妙に色合いの違うデュービーアが総柄にプリントしてある、非常に女の子らしい寝巻き姿。

そして、片足に包帯を巻いた素足の足首を雪絵は見逃さなかった。

「ちょっと、足見せて」

雪絵は、ベッドに腰掛けると、包帯を巻いた成美の左足に手を伸ばした。確かに触れる事が出来た。

「あなた、リストカットしてるの？」

雪絵が尋ねると、成美は彼女の手の上から自分の足首を押さえて肯いた。

包帯を巻いていない右足首にも明らかな自傷行為の傷跡が見えた。寺澤は初めてその事に気付いた。

しかし、今まで制服姿で現れた成美は、何時もソックスを履いていたのだから、気が付かなくても当然と言えば当然である。

「どうして、切るの？」

「いいでしょ、別に」

「何か、悩みでもあるの？」

雪絵は優しく話し続けた。その姿を、寺澤は、ソファに身体を乗り出すようにして見入っていた。

「自分でもわかんないよ」

成美は小さく首を横に振った。

「お父さんやお母さんは？この事知ってるの？」

「知るわけ無いよ。いつも、誰もいないわ……」

「どうして？」

「お母さんは仕事、お父さんは……女……みんな忙しいから、誰もあたしを見ないよ……」

雪絵は思わず振り返り、寺澤と顔を見合わせた。

「おまえ、この前生霊だって言っただよな」

「そうだったけ」

成美は少し冗談っぽく言った。

「ねえ、どうして、幽体が離れちゃうの？」

雪絵は、相変わらず静かに訊く。

「知らない。気付いたら外にいるのよ」

成美は淡々と応えた。

「ここが心地いいって、どう言うことだよ？」

寺澤が訊く。

「さあ、なんでだろ」

成美は再び曖昧に応えた。

「なあ、だったら本当の身体で遊びに来ればいいじゃないか」

寺澤は、ソファから身を乗り出すようにして彼女に言った。

雪絵が、再び寺澤の方を向いて「多分、無理よ」

「どうして？」

「だって、おそらくここにいる成美ちゃんの記憶は、本体の記憶に残らないわ」

「意思の疎通とかつて無いの？」

「それもたぶん無理ね。たぶん、この娘の意識は、成美ちゃん本人の知らない所で動いてるんですもの」

「うーん。そりゃ困ったな」

二人が顔をつき合わせて話しているうちに、雪絵のすぐ横にいたはずの成美は一瞬で消えてしまった。

そこにはバニラのような甘い残り香が穂のかに漂っていた。

「バニラの匂い・・・ まさかね」

雪絵は一人ごとを呟いた。

「どうして、寺澤君の側に来るのかしら・・・」

青梅街道を走る寺澤の車の助手席で雪絵が呟いた。

「寺澤君、何か思いあたらない？」

「さあ」

ただ首を傾げる寺澤に雪絵が

「まさか、路上で助けてもらった恩返しとか？」

「その割には、何にもしないぞ。テレビ見て、お茶飲んで・・・」

寺澤はそう言って笑った後

「俺は、本人とも会ったけどまったく心辺り無し」

車を運転する視線のまま言った。

「えっ、寺澤君、彼女と会ったの？」

「ああ、池袋駅で偶然見かけて、声を掛けてみたんだけど・・・俺の事、知らないって逃げられ・・・あ、そうか、意思の疎通がないから本人は俺に見覚えがないんだ」

寺澤は一人で納得して頭をかいた。

「どんな感じの娘だった」

「普通の女子高生って感じだったよ。友達ともケラケラ笑ってたし。リストカットしているような娘には見えなかったなあ」

小さな街灯が照らす哲学堂の交差点を、中野通りに右折した。

「リストカットしている娘って、意外と普通の娘らしいわよ。あ、その信号の手前で止めて」

中野通りの、西武新宿線の踏み切りを渡って直ぐの所で、雪絵は車を降りた。

「ありがとう、また今度行くわ。あの娘も気になるし。じゃあね、おやすみ」

彼女はそう言ってドアを閉めると、もう一度手を振って住宅街に通じる路地を入っていった。

【第11話】

成美は自分でも気が付かないうちに、大きなストレスを抱えていた。

それが、本当に父や母に対してだけのものなのか、確信は無い。ただ、誰かに側にいて欲しいという気持ちは確かなのだ。

夜な夜な街を徘徊する事もしない彼女にはその解消法が判らなかつた。

幸か不幸か、成美が最も親しい友人の佳代も美鈴も倫理的で、大抵は親の決めた門限通りに帰宅する。

援交や万引で憂さを晴らす娘もいるのだろうが、彼女の周囲、身近なところにはそういった行為をしている娘がいなかった。

同じクラスにもいるのかも知れないが、係わり合いも無く、縁も無かった。

彼氏とはセックスをする。しかし、知らないオヤジとそう言う事をしてお金を貰う行為に興味が無かったし、それで心が癒されるとは到底思えない。

ましてや万引で店に損害を与えるような行動もしたくないし、捕まって停学になるのもシャレにならない。

そんな彼女の生真面目な性格が、よりストレスを拡大させているのだろう。

せいぜい友達同士でカラオケに行くのが一番のストレス解消だと自分では思っていたが、本当の解消はリストカットによって行われている事に本人は気付かない。

* * * * *

何処からとも無く聞こえる金属が共鳴するような荒んだ音は、心臓の鼓動に合わせて音量が波打って、直接脳髓を刺激する。

耳をふさいでもそれは鳴り止む事は無く、永遠に続くタナトスのように彼女の心を深い闇へと導いていく。

ここにある肉体の苦痛から逃れる為に、彼女の精神は時折遠くの山々を駆け巡る。

見た事も無い緑の森に囲まれた湖の辺に佇む自分を、もう一人の成美が眺めている。

そこには、一ミリの苦痛も無く、ただ暖かい風が優しく吹き抜けていくだけなのだ。

しかし、もう一人の成美がここにいてはいけないと腕を掴んで彼女を連れ戻す。

そして苦痛が山盛りに詰まった肉体へ再び戻って来る。

それは、一回瞬きをした瞬間の出来事に過ぎない。

「成美、なんか顔色悪いけど大丈夫？」

休み時間中、一方的に喋っていた会話の途中で、佳代が言った。

成美には、その理由が判っていた。

昨日、博明との事で深夜にしこたま瀉血したせいだ。

「うん。ちょっとフラフラって感じ」

成美は、リストカットでの瀉血により、時折激しい貧血に見廻れた。今日はそれに加えてひどい耳鳴りがする。

直ぐ横で話している佳代の声が、やたら遠くに聞こえた。

周りのざわめきが、大浴場にでもいるかのように柔らかいエコーが掛かって、耳の中でバウンドする。

「保健室行った方がいいよ」

佳代の進めで成美はよたよたと立ち上がって保健室へ行った。

「あら、安二崎さん、また貧血？顔色悪いわね」

成美は学校の保健室の常連顔だったので、保健の先生にはスグに

状態が判ってしまう。

「ちゃんとご飯食べてる？栄養のあるもの食べないとだめよ」

成美は保健室が好きだった。

先生が優しくしてくれるからだ。

家では殆ど一人の彼女にとって、日常に人の優しさを明確に感じる事の出きる空間かもしれない。

「一度、病院に行つて見たら？」

「はあ」

保健の先生は頻繁に貧血を起こす成美を心配して言ったが、彼女はベッドの上で気の無い返事をした。

保健の鈴宮は「内臓から出血でもしていたら大変よ」と言つて心配するが、そんな事は無いだろうと成美は判つていた。

成美本人が、自分の身体から血液を抜き取っているのだから。

成美は保健室に行く前には必ず、薬を飲む。

この日もエバミールを2錠飲んでいた。

保健室で二、三時間ほど休むと大抵は気分も良くなり、教室へ戻る。

教室へ帰ると、普段あまり話をしない娘からも「大丈夫？」と言ううわわりの声が掛かる事が少しだけ嬉しかったりもする。

【第12話】

「安二崎さん」

放課後、保健の鈴宮が教室に来て成美を呼び止めた。

「私の知っている内科のお医者さんに連絡しておいたから、この病院に行ってみなさい。保険証は後でいって言ってたから」

内海内科・産婦人科……そう書かれた名刺を先生は彼女に渡した。

成美は、その病院へ仕方なく行ってみる事にした。

何時もに比べて体調の回復が遅いし、耳鳴りも少しだけ残っていた。

それに、せっかく電話をして頂いた、いつもお世話になっている

保健の先生の顔を、少しだけ立てておいてやるうかとも思っていた。

「あたし達も付いていってあげようか？」

佳代が言った。

「いいよ、子供じゃあるまいし」

成美は少し煙たがって言ったが、そんな小さなお節介が本当は嬉しかった。

「ちゃんと行きなよ」

佳代と美鈴はそう言って手を振ると、池袋で成美と別れた。

「鈴宮先生の紹介で来た、安二崎ですけど……」

受付で彼女がそう言うと、受付の女性が診療室の先生と連絡を取る。その間、成美は受け付けカウンターの前で待った。

（それにしても、以前通っていた歯科医にしても、病院の受付の女性には、どうして綺麗な人が多いのだろう……やっぱり客ウケを考えるのだろうか……）などと、待っている間に成美は変な事を考えていた。

待合室をそつと見渡す。当り前の事だが、椅子に腰掛けている診察待ちの人たちはみな元気がない。

しかし、内科の待合室には風邪などのウイルス性の患者もいる為、同じ空間にいただけで、自分も何かに感染してしまいそうな、そんな不安に成美は引き込まれる。

少しすると、受付の女性が戻ってきて、

「掛けてお待ちください」と優しい笑みを浮かべて言った。

しばらく待った後、診察となった。

検査の為の採血をした後、点滴を受けて小一時間ほど診療室の陰にある小さなベッドで横になっていた。

穂のかなクレゾールの匂いに満たされた空間で、彼女はウトウトと眠った。

微かに聞こえる看護婦達の歩き回る足音と指示、確認の話し声が、一人じゃないという安堵感を彼女に齎した。

成美が夜眠る時、何時も孤独に苛まれる。

肉体的には無く、精神的に孤独なのだ。

自宅で眠りに着く頃、家の中には彼女以外には誰もいない。

成美は何時も、廊下と階段の電気を点けっぱなしで眠る。

誰もいない大きな家に巣食う、真っ黒な魔物から自分を守る為だ。魔物は成美をその暗闇に飲み込もうとチャンスを伺っている。

もし自分がこのまま目を覚まさなくても、4、5日は誰も気付かないかもしれない。

きっと学校から無断欠席の連絡が母の携帯に入り、初めて部屋を覗き、そこで腐りかけた自分の遺体に気付くのだ。

そんな妄想が恐怖に替わる。

暗闇に潜む魔物は、彼女の心理が作り出す妄想そのものだ。

目蓋を閉じた時、学校の保健室やこの病院の診察室は、微かな話し声や人の気配が安堵感に替わるのだ。

鉄剤と頭痛薬が処方された。睡眠薬も貰えるのかと思っていたが、滅多に出さないのだと言う。

ネットで売買されているあれだけの薬はいつたい何処から出てくるのだろっ……そんな疑問を過ぎらせながら、成美は病院を後にした。

空の藍色はコバルトからダークな紺色にグラデーションして、西方のビルの谷間に微かな残照を残していた。

黒いタイトなプリントＴシャツにリーバイスのブルージーンズ。

上に白いシャツを羽織って、淡いピンクのグロスを、ブラシを使って唇にのせると、NBのスニーカーを履いて家を出た。

成美はシンプルな服装を好む為、何処に行くにも私服はこんな感じだ。

土曜日の午後、成美は友達的美鈴と新宿で待ち合わせをした。

身体は少しだるいが、青い空に浮かぶ雲があまりにも気持ち良さげで、自分の心も晴れやかだった。

約束の時間よりも早く着いた彼女は、一人でジェラートの店でアイスを買って食べていた。

駅ビルの前を沢山の若者達と少量のサラリーマンが行き交う様子を眺めながら彼女は思った。

この人達の中で、今夜一人なのは誰と誰……

あたしと同じに、孤独の闇に包まれながら、希望や安らぎとはほど遠い明日に向かって通過する時間だけを待っているのは誰？

目の前を、身体が融合してしまいそうなほどくっ付き合ったカップルが通り過ぎる。

彼女の身体が半分彼氏の身体にめり込んでそうで、幸せいっぱいと言った感じが溢れている。

（あれで、歩き難い難くないのかしら。でもそれは今だけよ・・・いずれ、あなたは悲しみの最下層まで落とされるのよ）

金色のロン毛を靡かせた彼氏の胸元に頬を当てながら、うつとりと微笑む女性を、成美は瞳の動きだけで追い、心の中で彼女に向かって中指を立てた。

【第13話】

「彼女、一人？」

胡散臭そうな、スカーレットのスーツを身に纏った茶髪の男が、死角から声を掛けて来た。

「俺、モデルのスカウトやってるんだけど、どう？やってみる気ない」

男は、さわやかを通り越した不気味な笑顔で語っている。

どう見ても新人AV女優発掘といった感じだ。

しかも成美は、その男の鼻にくっ付いたピアスが妙に気になって、まともに話を聞いてもらえない。

「あ、興味無いですから」

「歳いくつ？高校生？大学生？」

鼻ピアスの男は喋り続けている。

なんだ、こいつ……

名刺を差し出す男を無視して、成美は自分からその場を足早に移動した。

「ちっ」と言う舌打ちが間違はなく聞こえた。

少し歩いてからチラリと振り返ると、既に違う少女を捕まえて話し掛けている男の姿が見えた。

ああいうのについて行くと、また違った世界が覗けるのだろうか・

彼女はそんな事を考えながら、新宿PePeの二画に在るボードショップの前のベンチに腰を下ろした。

5分もしないうちに、ブルーのチェックのミニスカートを履いて美鈴がやって来た。

買い物をしてカラオケを三時間、その後久しぶりに一人じゃない夕食の時間を、美鈴と共に過ごした。

「ねえ、E組の桜井って娘、援交で妊娠したって」

美鈴が言った。

「ほんと？」

「昨日、相談室に入っていくのを梨香が見たって」

相談室に呼ばれるのは、大体が同じ理由だ。

よつぽどの家庭の事情相談でもない限り、何でも無い日に相談室を訪れる娘はみな同じ理由なのだ。

以前から援交の噂があつた彼女は、忽ちそんな憶測が広まったのだらう。

「ふーん」

成美は片肘をついて、デザートのパフェをスプーンで口に運んだ。援交と言う言葉を気軽に使っても、それは分厚い壁に隔てられた自分達とは違う空間で起きている事にしか感じなかった。

美鈴から見れば、リストカット症候群もおそらくは同じ壁の向こうの出来事に感じるだらう。

そう考えると、成美の身体の半分は、既に友達の知らない壁の向こうへ入ってしまったているのだらうか。

成美は少しだけ美鈴や佳代との隔たりを感じた。

家に帰ったのは10時頃だった。

彼女は大きな熊プーのぬいぐるみを抱えて駅の階段を降りた。

すれ違う人波の視線が、抱えたぬいぐるみに注がれるのが鬱陶しい。

帰りにサンシャイン通りのゲームセンターでクレーンゲームをしたら、さっきまであんなにゆるゆるだったクレーンの爪が、いきなり特大熊プーを持ち上げたのだ。

「キヤー、成美凄すぎ!」

美鈴は、こんな大きな景品を取ったのを観た事が無いと言って大はしゃぎだった。

しかし、その前まで夢中でやって一つも取れなかったカップルに白い目で睨まれた。

成美はもつと遊んでいたかったが、美鈴の門限が10時だったので、一人でぶらつく気にもなれずに彼女も帰って来た。

石神井駅の階段を降りると、ロータリーの隅で、制服を着た高校生のカップルが濃厚なキスをしているのを見かけ、フツと博明の事が頭を過ぎり、成美は無理やり掻き消した。

石神井公園の脇を通って家の前まで来ると、電気の点いていない真っ暗で誰もいない大きな家よりも、幾つもの水銀灯で照らされた向かい側の公園内の方が、彼女には暖かく見えた。

池の周辺の林からにぎやかなカエルの鳴き声が聞こえる。

夜のロードワークをする、いかにもボクサー風の青年が遊歩道を駆け抜けていく。

成美は公園内のベンチに座って、草むらから聞こえるカエルの合唱を、しばらくの間、60センチはある特大熊プーと一緒に聞いていた。

お風呂から上がった成美は、ベッドに投げ出したままの熊プーのぬいぐるみをベッドの横に座らせて、何となく、ハルシオンとレキソタンを一錠ずつ飲んで眠りについた。

彼女は最近夢をみる。

なんとなく落ち着く、楽しい気持ちになる夢だ。

居心地のイイ空間に誰かと一緒にいる。

しかし夢の内容はまったく覚えてなくて、一緒にいるのが誰なのかも判らない。

朝起きると時々手に持っているペットボトルが気がかりだったが、

以前のよう、胸が苦しくなる孤独感に苛まれながら起きる朝は少なくなつた。

寧ろ、目が覚めた瞬間、心の中に暖かさを感じて、それが何故なのか何時も夢の記憶を辿る。

しかし、行き着く先はただの濃い霧のかかったような擦れた闇ではない。

【第14話】

「雪絵」

雪絵が仕事を終えてオフィスビルを出た時、男が声を掛けて来た。

「なに？待ち伏せなんてやめて」

「考え直せよ」

「もう、無理よ」

男は雪絵が以前付き合っていた男だった。

「諦め切れないんだ」

「もう諦めて、付きまとうのはやめて」

雪絵は少しだけ強い口調で言った。

男が雪絵の手首を掴んだ。

「ちよつと、放して」

その時、ビルの階段を寺澤が降りてきた。

「あ、寺澤くん」

雪絵はすかさず彼の名を呼んだ。

男が慌てて雪絵の手を放す。

「ご飯でも食べにいかない？」

「えっ？・・・いいけど」

寺澤は雪絵に腕を引かれて、そのまま歩いて行った。

その後方の暗闇では、憎悪にも似た屈折した愛情に支配された男が、開ききった瞳孔で二人の姿を見つめていた。

次の週末の夜、成美は佳代に付き合って、一緒に横浜に出かけた。
バンドをしているケンジのライブを見る為だった。

元町の外れにある小さな倉庫を改装したライブハウスで、小さな
入り口を入ると、通路の壁全体は、今までここを利用したバンド

の写真やチラシやステッカーで隙間無く埋め尽くされている。

床はコンクリートの打ちっぱなしで、会場内は思っていたほど広くは無い。

ステージの前にはボーカルが足を乗せる為に在るような大きなアンプが二つ置いてあり、客席のパイプ椅子が5〜60席並べられているが、スタンディングを入れると100人以上は入るのだとか。

楽屋に行くと他のバンドもいて、狭い室内に長髪、金髪がゴチャゴチャと、ある者はヘアスプレーで髪を逆立て、ある者はギターのチューニングをしていた。

どうやら単独ではなく、合同ライブのようだった。

佳代は友達と言っていたが、どうやらケンジに気があるらしい事が成美にはひと目で判った。

彼女の彼を見る目が、人が違ったように輝かしい。

あんなに輝く彼女の瞳は見たことが無かった。

成美は、何を見た時、自分の瞳はあんなに輝くのだろうと、楽屋の端っこに佇んで考えていた。

ライブが始まって判った事だが、合同だと思っていたバンド連中は、実はただの前座で、後半のほとんどの時間は一つのグループが演奏を行った。

成美達の入った楽屋にいなかった彼らは、別に個室を貰っていたのだろう。

当然のように成美には聞き覚えのない名前のバンドだったが、殆どの客が途端にスタンディングした所を見ると、巷では人気のアマチュアバンドなのだろう。

佳代も立ち上がったので、成美も仕方なく立ち上がって両手を上げてそれを叩いた。

【第15話】

ライブが終了すると、大通りを挟んだ貸し倉庫の一角でパーティーが始まった。

ひたすら大音量で流れるアップテンポな曲とDJ。ユーロビート系からトランスまでレパトリーは様々だった。

終電で帰る予定の成美と佳代は、少し顔を出す程度、と言う事でケンジ達に誘われ、ここまでついて来た。

ライブに来たお客と、パーティーだけが目当ての客が入り乱れて倉庫内は熱気に満ちていた。

成美は、この大音量がひたすら流れる空間に馴染めず、入り口付近でドリンクを口にしていた。

時間は11時を過ぎている。

成美は、薄暗く、工事用の照明を使って極端に陰影を浮かび上げらせる室内お見渡す。

先ほどから、佳代の姿が見えないのだ。携帯に何度も掛けてみたが、出る様子が無い。ケンジのバンドメンバーを探すが、それも見つからなかった。

ライトの光が届かない暗がりでは、抱き合った男女が何人も濃厚なキスをしている。

中には、既に衣服を半分以上脱いでいる女性の姿もあった。

成美はおかしな臭いに気付いた。それは、タバコの臭いでは無い。嗅いだ事の無い、薬品のようでお香のようだった。

その人影の周りには、微かに届くライトの光に照らされて、黄粉色の煙が漂っているのが見えた。

成美は急に佳代の事が心配になった。

「1人？」

男が近づいて来て成美に声をかけた。

ライダースジャケットに革パンツを履いたその男は、目の焦点が

合っていない。

「いいえ、連れが……」

成美はその男に何かを訊いても無駄だと思ったが

「あの、ケンジ知りません？」

大声で話さないと相手に聞こえない。

「なんだ、ケンジの連れ？」

「ええ、友達と一緒になんです」

「ケンジなら外へ出たぜ」

男はそれの回らない口調で言った。

倉庫の裏には、バンドのバンが何台か停まっっていて、疲れた連中がシートにもたれてタバコを吸ったり、酒を飲んだりしている。いかげん、喧騒に疲れた連中だろうか。

成美はその辺にいるバンド関係者であろう人を捕まえて、手当たり次第に訊いたが、みんなケンジを見ていないと言う。

「また、あれじゃねえの」

すぐ後にいた男が言った。

「あれって、何ですか？」

成美は直ぐに訊き返した。

「あ、ああ。ん、ん」

男は軽く咳払いをした。

「キミ、ケンジのファンかい？」

「いいえ。友達が、彼の知り合いで、それで今日観に来たんです」

「そうか。アイツのファンならやめた方がいいと思ってさ……」

男は金色の短髪を自分の手で撫でながら言った。

「どういう事ですか？」

「あいつら、時々ファンだって言って近づいてくる娘達をマウスっていう噂なんだ」

「マウス……？」

成美はその現実味を帯びた言い方に身震いした。

「おい、あまり関わると・・・」

金髪の男が、横にいた赤い髪の男に肩を突かれた。

「あたしの友達もまさか・・・」

「通りの向こうの貸し倉庫に行ってみな。でも、一人じゃ危ないぜ。それしか言えない。じゃあ」

そう言って、金髪の男は赤い髪の男とオンボロのバンに乗り込んだ。

成美は通りの向こうに並ぶ幾つかの倉庫群を見つめた。

あの金髪の男が言った「マウス」と言う言葉がとてもグロテスクに頭の中を駆け巡った。

成美は横断歩道を横切って、通りの向こうに並ぶ倉庫街へ駆け出した。

高速道路の高架下を抜けると、今いた場所よりも大きな倉庫が並んでいる。

成美は人の気配を探して倉庫の前を歩いた。全部で8つの倉庫が並んで奥から番号が振ってある。

その周りには大きなフォークリフトが数台置いてあった。

隣の建物との間は、トラック一台分くらいの幅があり、一つの建物に5つの扉があつてそれぞれにも番号がふつてある。中で仕切られていたようだった。

月明かりと街灯で辺りはそんなに暗くは無かったが、倉庫の間の通路は建物の影で暗黒に包まれていた。

成美は建物の間の路地に足を踏み見入れた。小さな街灯だけが薄暗く点灯している。

本当に、こんな所に佳代がいるのだろうか・・・

成美はその空虚な景色に、急激な心細さを感じて踏み出す足が震えた。

一端踏み出した足は、自然とスピードを上げ、彼女は足早に路地を通り抜けて倉庫の裏に出ると、隣の路地に入った。

微かな物音で成美は足を止めた。

「四―二」扉には、そう番号が書いてある。

成美は冷たい鉄の扉に耳を当てた。

誰がいる……

「どうせ、少しは期待して来たんだろ」

「大人しくしてれば怪我もしないし、気持ちよくしてやるよ」

何人かの男の声と、何かもがくような、うめくような声が聞こえる。

成美の額から薄っすらと汗が流れた。

彼女は鉄の扉に手を掛けて思い切って横に引いた、

ゴ―ツと重い音が暗がりには響いた。

中は薄らと明るい、人影が確認できるだけで、顔や身なりまではよく見えなかった。

【第16話】

「あの・・・」

成美は足を踏み入れて驚愕した。

微かな明かりに照らされて見えたのは、佳代の下着姿だったのだ。Ｔシャツとスカートが、床に無造作に投げ捨てられているのが見えた。

タオルで猿轡をされ、髪の毛がクシャクシャに乱れた佳代が涙目でこちらを見ていた。

佳代は成美に向かって何かを言おうとしているようだった。

「佳代！」

成美は思わず叫んで、佳代に駆け寄ろうとしたその時

「おっと」

誰かが成美の腕を後から強く掴んだ。

驚きと痛みで顔を歪ませて、成美は振り向いた。

そこにいた男は見たことが無い。いや、あの時、ライブハウスの控え室の中で見た顔かもしれない。

成美はとっさに声が出なかった。

「おい、一人増えたぜ。どうする」

成美の腕を掴んだ男は、奥の連中に言った。

奥には3人の人影が見える。そのうちの一人がゆっくり近づいて言った。

「二手に分かれて、一人2プレイでいいんじゃない」

それは、ケンジのバンドのギターでリユウと呼ばれている男だった。

「ケンジは何処？」

成美はやっと声が出せた。

「さあね」

リュウは薄ら笑いで応える。

「あんた達、佳代を・・・」

「これからって言う、丁度いい所へ来たな」

瞳孔が開ききったリュウの目に、天上から射す暗いライトの光が吸い込まれていくようだ。

その数メートル後ろでは、佳代がうめいている。

成美は両腕をつかまれて、佳代と少し離れた場所に誘導された。

これから自分達の身に起こることを想像するだけで、不安と恐怖で足が震えた。

リュウが成美のＴシャツを捲り上げて脱がせようとした。

彼女は、両腕を下げ、脇を締めてそれを拒む。

「ほら、Ｔシャツ破いたら帰り大変だよ」

リュウが笑って言う。

「やめて！」

成美は身を擦って抵抗する。

しかし、その時ふと頭に浮かんだ。

こんな所で大勢に乱暴されるより、暴れ膜って殺させた方がいいかもしれない。

どうせ半分以上は投げやりな人生だ。

佳代は多分、男を知らない。

こんな奴らが最初ではあまりに惨い・・・

勢い余って自分が殺されでもしたら、こいつらだって慌てて、佳代を置いて逃げ出すだろう。

成美はそう考えると、何故か少しだけ冷静さを取り戻すのだった。自分が身体力を抜くと、彼女を掴んでいる男の手の力も心持ち緩んだ気がした。

「やめろ！」

成美は大声を上げて全身に力をこめ、両腕を思い切りメチャクチャに振り回した。

突然の事で、彼女の腕を掴んでいた男の手も外れた。

「バカ野郎！しっかり抑えとけ」

リュウが怒鳴った。

捨て身でメチャクチャに暴れる成美の身体を抑えるのは、男二人でも容易では無かった。

「この女、イカれてんじゃねえの」

男は、暴れる大魚のような彼女をなかなか掴めなかった。

その時、倉庫の入り口から誰かが走り寄る足音がした、と思うとガンツと、成美の腕を再び掴もうとしていた男が床に倒れた。

成美は一瞬何が起こったのか判らない。

「リュウ！お前」

その怒鳴る声はケンジだった。彼は角材を手に行している。

身体が自由になった成美は、佳代の所へ駆け寄って、彼女を抑えていた男の一人を力いっぱい突き飛ばした。

ケンジの乱入に驚いた男は油断していた。

飛ばされた男はシートの掛かった荷物に全身をぶつけて倒れた。

佳代のもう片方の腕を掴んでいた男は、ケンジの乱入と事態の混乱に驚いて、完全に怖気付いていた。

無言のまま突然思い切り走り出して、倉庫から逃走した。

「佳代！」

成美は、佳代の猿轡のタオルを外した。

「成美！」

自由になった佳代は、成美に思い切り抱きついた。

「リュウ、お前だったのか・・・ 女の子に乱暴しているって言う噂の根源は」

ケンジは肩で大きく息をしながら言った。

「はん。お前が真面目すぎるんだよ。こんな事でもなけりや、やってらんねえぜ」

リュウは悪びれた様子も無く吐き捨てた。

「佳代、大丈夫？」

成美が声を掛けると

「うん、危機一髪って感じ」

そう言いながら、佳代の目からは次々に涙が溢れてこぼれ落ちる。成美は佳代の頭を自分の肩で受け止めた。

何時もの二人の役割は逆転していた。

しかし、これが親友同士だからこそ、ケースバイケースなのだと、成美は思った。

その時、佳代がいきなり近くにあった角材を手にして振りかぶった。

【第17話】

成美は無言の佳代の行動に少しだけ身構えた。

何が大それたか判らなかつた。

振り下ろされたその角材に、成美は目を瞑つた。

しかしその角材は、自分の横をかすめて後へ伸びた。

佳代は成美の後ろで起き上がるうとしていた男の頭を、角材で思い切り殴りつけたのだ。

起き上がるうとした男は、再び床に倒れこんだ。

「リュウ。こんなことして・・・判つてるのか！」

ケンジの声が倉庫内に響き渡る。

「お前だつて女とよろしくやってんだろ」

リュウが言い返した言葉に、佳代が反応した。

「あの娘とはちゃんと付き合つてる。お前とは違う」

「佳代に手を出した事、怒ってるのか？そりゃ、悪い事したな。どうせストックだろ」

リュウがにやけて言つた。

「そんなんじゃない。誰を襲つてもいいわけないだろう。それに佳代は大切な友達だ」

ケンジはリュウの言い訳が、無性に腹立たしかつた。

成美は二人の会話に聞き入る佳代に

「佳代、今のうちに服を着て」

そう言つて、佳代の服を床から拾い上げた。

「もう、バンドも終わりだな」

リュウが投げやりに言う。

「ああ、当り前だ。ただし、お前と組む事がだ。俺は、諦めずにバンドを続ける。お前みたいに、こんな事で憂さを晴らすような奴は願ひ下げだ」

「そんな事言つて、何時までも誰かの前座を続けるつもりか」

「前座だろうがメインだろうが、俺は俺の音楽をやり通す。ただ、それだけだ」

リュウは静かに目を細めて

「勝手にしな」

カチャっと言う金属音がして、リュウの手に飛び出しナイフが握られ、天上からの弱い光に微かに反射光を發した。

ケンジは持っていた角材を構えた。

リュウは自分を刺すだろうか・・・ いや、今の彼なら何をするか判らない。

ケンジは、かつての親友の行動が、もはや予測できなかった。

リュウは横っ飛びに走ると、僅かに近い位置にいた成美の身体を力任せに抱き寄せて、ナイフを突きつけた。

「成美！」

佳代が叫ぶ。

「お前・・・何処まで腐っちまったんだ・・・」

リュウの何処までも卑劣な行動に、ケンジは悲しげな眼差しで睨みつけた。

ケンジとリュウは、高校時代に初めてアマチュアバンドを結成して以来の付き合いだった。

二人共ただ音楽が好きで、閑古鳥のライブを何度も経験して、それでもずっと一緒に音楽を続けたいと笑い合った。

成美は、突然の事態に身体が硬直して動けなかった。

喉元に冷たい感触が伝わっていた。

刃物を直接突きつけられると、身体が竦んで、さすがに捨て身の行動もとれない。

身体を少しでも動かせば、確実に冷たい刃は喉を切り裂く位置に当てられていた。

「とりあえずズラかるぜ。俺を追うなよ」

リュウは成美を掴んだまま引きずるように、出口の方へ歩き出そ

うとした。

その時、成美は一瞬飛びついてくる佳代の姿がアップになるのが見えた。

「イテッ！」

リュウが突然叫んで、ナイフを手から落とした。

佳代の頭の影で、成美には状況が判らなかった。

佳代はリュウの右手に噛み付いたのだ。

彼女は、まるで今の心のショックや悲痛、その全てをぶつけるかのようにリュウの腕を噛み切らんばかりに噛み付いていた。

「てめえ！」

リュウが左手で佳代の髪の毛を鷲掴みにして、前後に強く振った。成美の頬に小さな液体の粒が飛んだ。それは、佳代の頬を伝っていた涙の粒だった。

「佳代！」

成美は、思い切りリュウの足を踏んで、肘で彼の鳩尾を突く。

「うつ」と前屈みになった所へ、ケンジが走り込み右ストレート。

彼は無意識に角材を投げ捨て、素手で飛び込んで来た。

痩せ細った体の、いかにもパンクバンドと言った風貌のケンジが繰り出したパンチは、およそ綺麗とはいえないが、しっかりとリュウの顔を捉えた。

リュウの手が離れた拍子に、佳代が大きく後に倒れ、同じく自由になった成美はそれに駆け寄った。

ケンジは勢い付いて、リュウの腹に膝蹴りを繰り出す。

それも、K-1選手のような綺麗なものではなかったが、腹筋を鍛えているわけでもないリュウをダウンさせるには十分だった。

「佳代、大丈夫？」

「うん。平気。でも怖かった」

「あたしも、怖かった」

二人は抱き合って一緒に泣いた。

「大丈夫か？ごめんな」

ケンジは二人の肩にそつと手を置くと、自分もしやがみ込んで

「ごめん、佳代」

「あんた、彼女いたの？」

佳代は静かに訊いた。

「ああ、ごめん・・・」

ケンジは何度も佳代に謝った。

佳代は何も応えなかった。

「成美も・・・」

「あたしは平気。どうしてここが？」

成美は複雑な気持ちで、少しだけ微笑んでケンジを見た。

「キミらの帰る時間が心配で、会場に戻ったんだ。そしたら裏にいた連中が教えてくれたよ」

「ケンジは知らなかったの？」

「ああ、以前から妙な噂が立って、不審に思っていたけどね。さあ、ここを出よう」

ケンジが支えようと佳代に手を伸ばした時

「大丈夫、あたしが」

そう言って、成美が佳代を支えて立ち上がると、一緒に倉庫を出た。

佳代の頬を何時までも伝う涙が、恐怖のショックからくるものなのか、切ない悲しみからくるものなのか、成美はただ彼女を支えていた。

【第18話】

寺澤は顔じゅうを這い回る生暖かい感触で目を覚ました。

まどろみの中に片足を入れたような薄っすらとした目覚めだった。まさか、成美が俺の顔を……

眠たい目を渋々開けた寺澤の目に飛び込んで来たのは、毛むくじやらで少し濡れた黒い鼻。

「うわっ」

彼は反射的にその物体を手で払い除けた。

「キャウン！」

と、小さく鳴いた。

キャウン？……

寺澤が起き上がって見ると、成美が仔犬を抱えて寺澤の横に座っていた。

やけに汚れてはいるが、ゴールデンレトリバーの仔犬のようだった。

「なんだ？ どうしたんだよ、それ」

寺澤は理由が判らず、頭をかいた。

「捨てられてたの」

成美が言った。

「だからって、そんなの拾ってくるなよ」

「だって、かわいそうじゃん」

「ここは、アパートだぞ。犬は飼えないよ」

「だって……」

成美は少ししょんぼりとして言った。

寺澤も別に犬が嫌いなわけではない。寧ろ、動物は子供の頃から好きな方だろう。

ただ、東京のアパート暮らしは、動物との共同生活を許してはくれないのだ。都心の高級マンションならば、ペット可の所もあるが、

今の彼がそんな所に住めるはずも無い。

「そう言えば、キミン家はとうなんだ？」

俯いていた成美が顔を上げて

「一戸建て」

「なんだよ、じゃあ、持って帰って勝手に飼えよ」

寺澤はゴロリとベッドに転がった。

「家の人が驚くよ」

「俺だって驚いたよ」

寺澤は再び起き上がった。

「ねえ、なんとか本当のあたしに渡して」

「はあ？」

「本当のあたしならきつと飼うわ。だから、どうにかしてあたしに渡して」

「だって、池袋で会ったキミンは、妙に警戒してたぞ」

「そこを、何とかしてさ」

「なんで、俺がそんな事まで。だいたい、なんでお前、俺の所に来るんだよ」

寺澤は、タバコを咥え火をつけると

「だいたい知らない他人から犬なんて貰わないだろ。この年で新手的痴漢に間違われるのはヤダぜ」

「そんな事言うんなら、獲り付いてやる」

「ああ？ 生霊は獲り付かないだろ」

そう言われた成美は、少しムツとしたかと思うと、両手で顔を覆って肩を振るわせた。

「おいおい……」

成美は鼻をすすりながら更に大きく肩を震わせ

「この仔がかわいそう……」

「判ったよ。やりやあいいんだろ……」

「ほんと？」

成美が顔を上げると頬は濡れてなかった。

けろつとした笑顔で「約束よ。絶対よ」

寺澤は、肩をすくめて大きく溜息をつくと、首をうな垂れた。

「そう考え込まずにさ、ご褒美に、チューしてあげるから」

そう言っ成美は寺澤に顔を近づけたが、彼はさっと身を引いて

「いや、やめておく……」

【第19話】

「さて、どうやって彼女にこの犬を渡すか……」

朝起きた時には成美の姿は無く、小さなダンボールに入った仔犬だけが寺澤の部屋にいた。

近くのコンビニへ行き、ミルクを買って来ると、食パンを潰して与えた。

「生霊が、犬拾ってくるかね……」寺澤は呟いた。

彼はとりあえず、雪絵の携帯に電話した。

中野の大通りに寺澤の車が着く頃、彼女は迎えに出て姿を見せていた。

普段は見る事が無い、ブルージーンズにオレンジ色のＴシャツというラフな格好と、下ろすと以外と長いツヤのある栗色の髪が、寺澤の目にはやけに新鮮に映った。

「どうしたの、休みの日にいきなり電話よこして相談したい事なんて」

寺澤は車のリヤシートに置いたダンボール箱を開けて見せた。

「何、かわいいー。どうしたの、この仔犬」

雪絵は思わず仔犬の頭を撫でながら言った。

「成美が拾ってきた」

寺澤は無表情で応えた。

「うそ……」

彼女は、一瞬手を止めて信じられないという顔をして寺澤の方を見た。

「本当……」

寺澤は、同感という素振りで応えた。

「成美ちゃんも優しい娘なのね」

「おいおい、感心してる場合か。これをどうにかして、本当の成美

に渡したいんだ。なんか、いい方法ないかな」

「えっ、彼女にあげるの？」

「そうすれば少しは寂しさが癒せるんじゃないかって……彼女の希望なんだけどね」

「本人の希望なのに、その娘にあげる工夫が必要だなんて、なんだか変な話ね」

「変なのは、今始まった事じゃないからな……」

「この仔、ちよっと汚いから、とりあえず洗ってきれいにしてあげましょう」

雪絵はそう言って、寺澤の車に乗り込むと、彼女の家へ向かった。

中野の住宅街の路地を入ると間も無く着いたが、一方通行が多いため、何度か遠回りの右折と左折を繰り返した。

彼女は実家住まいだった。

レンガの塀で囲われた洋風造りの一軒家だった。普段は父親のセルシオが停まっているというガレージに、寺澤は車を滑り込ませた。「さあ、上がっていいよ」

玄関を入ってスグに、右へ曲がる廊下があり、一段下がって石畳が二メートルほど続いている。その左側の壁はガラス貼りで、ガラスの向こうには一坪ほどの、観賞用の中庭が設けられ、直立した石盤を流れる小さな滝も見える。

室内なのに屋外のような不思議な空間だ。

訊けば、彼女の父親は大手企業で工業デザインをしているそうで、自宅のデザインも原案は父親なのだとか。

石畳を渡った所のドアを開けると、彼女の部屋がある。ちょうど離れのような造りらしい。

本物のフローリングの真ん中には、白地にグレーとターコイズブルーで模様が染められた大きなラグが敷いてある。

ベッドには、ワインレッドとセピア色の幾何学模様が描かれたベツドカバーが掛けられていた。

寺澤は、新鮮な風景を見渡した。

クラシカルウッドのチェストの上には、バリ島の工芸品の置物が数個連ねて置いてあり、その横にはカエルの置物。

「あんまり、じろじろ見ないで」

「あ、なんか楽しい部屋だね」

小さな赤い鏡台の横にはボー・ジョボー人形が掛けてあったが、寺澤の目には奇妙な木製人形としか映らなかった。

ふと本棚に目が行った。

コミックが半分を占めているが、もう半分はハードカバーや文庫の小説が並んでいる。

一番下の棚に差し込まれた一冊の、大判の本に寺澤の目が止まった。

彼は雪絵に断る前にその本を手にとった。

「あ、それ小学校の頃に買って貰った絵本よ」

淡い水色に紺色で縁取られた白い文字で「天使の香り」と書いてあった。

寺澤は何となく興味を引かれページを開く。

「そういえば、あたし思ったんだけど・・・」

雪絵はそう言いかけて、言葉を切った。寺澤が、真剣に絵本を読み出したからだ。

それは絵本と言うよりも児童書と言う感じで、思いのほか字数が多かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

天使の香り ロメリオ・ガネット「作 長嶋玲司「訳

天使は誰もがなりえる権利を持っている。

天使は救った人間の苦悩、苦痛を一生背負わなければならない。

そして、多くの天使たちは、その苦痛に耐え切れず、無の世界へと自分の存在を消し去る。

天使は善意が作り出す幻影。

しかし、誰かを救いたいと言う強い気持ちがこの世に芽生える限り、天使は存在するのだ。

寺澤はページをめくり続けた

天使の香り【1】

少女は重い難病に侵されていた。

その昔、その時代の医学では原因が特定できず、治療は不可能だった。

全身の筋肉が麻痺して、感覚を失い、最後は心臓の筋肉もその機能を失い止まってしまうのだ。

彼女は最初に右腕の感覚を失った。

残った左腕で文字を書き、食事をした。

彼女は絵を描くのが好きだった。

町の展覧会で入賞した事もあった。

左腕ではどうにも上手く描けなかったが、それでも少女は絵を描き続けた。

その次に少女は左足の自由を失った。

それでも彼女は、右足だけで歩き回り、共働きの両親には負担をかけまいと家事の手伝いまでしていた。

医者に見てもらっただけでも大変なお金がかかるのだ。

町じゅうの医者に見てもらった少女は、隣の大きな町の大きな病院にも通ったが、治療法は解らなかった。

「なんだこれ、へったくそな絵だな」

家の近くの小さな森の入り口で絵を描いていたある日、その少年は少女に声を掛けて来た。

隣の家までは100メートルはある。そのまた隣まで100メー

トル。

町外れにある家々はそんな感じだったから、近くに住む親しい子供はいなかった。

「あなた、誰？」

少女は警戒する事も無く、その見知らぬ少年に話し掛けた。

「僕はククルって言っんだ」

「ククル？変った名前ね。あたしはアンジェリカ。みんなはアンジエって呼ぶわ」

少女は屈託の無い笑顔で少年を見つめた。

「あなたって、バニラの香りがするのね」

「そうかい？」

「うん。すごくいい匂い」

「それは、光栄だね」

少年はキラキラとした、涼しげな青い目をしていた。

「絵が好きなのかい？」

「うん」

「その割には、へただな」

少年の透き通るような金色の髪がサラサラと風でそよいでいた。

「あたし、本当は右利きなの。でも、もう右手は動かないの」

「へえ、それで左手で描いてるのか」

少年は手を腰に当てて、首を傾げながら

「まあ、それなりに味のある絵だよな」

「ありがとう」

アンジェの笑顔はククルの心に暖かい火を灯すような、そんな笑顔だった。

アンジェリカは学校に行っていなかった。もちろん、健康な頃はみんなと同じように学校へ通い、友達と遊んだ。

しかし、病気の症状が出ると、学校側から「来られると困る」

そう、言われたのだった。
身体の不自由になった彼女にとって、まだまだ偏見の多い時代だった。

次の日、アンジェリカが何時もの森の入り口まで来ると、ククルが立っていた。

「キミは、足も悪いのかい？」

少女はピョンピョンと杖をつきながら、右足だけで歩いて来たのだ。

「うん。左足も動かないの」

「それは、大変だね」

少年は木にもたれて、少女がイーゼルにキャンバスを立てかける様子を眺めていた。

「ククルは何処から来るの？」

「僕は、この森の奥に住んでるんだ」

「この森に人が住んでるなんて知らなかった」

「僕の家周りにはバニラの花が咲いていて、それを乾燥させて食べるんだ」

「バニラの花を食べるの？」

アンジェは大きく瞬きをしながら言った。

「ああ、けっこう旨いよ」

ククルの瞳は、澄んだ青空を映しているようだった。

「だから、ククルはバニラの匂いがするのね」

アンジェはそう言って笑い

「ククルは、この森の奥で一人で暮らしてるの？」

「いや、母親と一緒にさ」

「やさしい？」

「いや、鬼だね」

ククルは笑って言った。そして、アンジェも笑った。

天使の香り【2】

日が西へ傾く前に、アンジェは家に帰る。

「まだ、いいだろ。日暮れまで、まだ時間はあるよ」
ククルが名残惜しそうに言った。

「夕飯の支度をしないといけないの」

「お母さんは夕飯の支度をしてくれないの？」

少女は小さく首を横に振って

「お父さんも、お母さんも働いているし、あたしの病気にお金も掛かるから、少しでも家の手伝いをしたいの」

「病氣って、お金が掛かるのかい？」

「お医者に見てもらうには、お金がかかるわ」

ククルは家に帰るアンジェの後ろ姿を、何時も寂しそうに見送った。

彼女は途中で何度か振り返り、笑顔で小さく手を振った。

彼女は助けを求めなかった。

ククルは何時も見ているだけ。

一度、アンジェが画材道具を持ったまま、転んだ事があった。

さすがのククルも

「大丈夫かい？手を貸そうか？」

「いいわ、自分の事は自分でしたいから」

そう言って、アンジェは笑いながら、這いずるように片腕と片足で立ち上がった。

小さな森の入り口で、ククルとアンジェは毎日会い、会話を楽しんだ。

ククルの青い瞳は、アンジェの心に瑞々しい潤いを与え、アンジェの笑顔はククルに心の温かさを与えた。

しかし、一週間が過ぎた頃、何時もの場所にアンジェの姿は無か

った。

「ここにいたんだね」

小さな病室の入り口にククルが立っていた。

アンジエはベッドから起き上がって

「ごめんなさい。朝起きたら、右足が動かなかったの」

そう言って、小さく微笑んだ。

窓から入る月明かりに、ククルの金色の髪は白く光っていた。

「右足が?・・・」

アンジエは小さく肯いて

「そのうち左腕も動かなくなる。そして、全身が動かなくなって、最後は心臓も動かなくなるのよ」

「死ぬって・・・事?」

アンジエは黙って小さく肯いた。

「でも、また会えるよね?」

「死んだら、もう会えないわ」

「二度と?」

「そうね、二度と会えないわ」

ククルは悲しい目をして口を噤んだまま、病室を飛び出していった。

アンジエは、夜空に輝くシルバーイエローの満月を静かに見上げた。

「母さん、彼女に会いに行けって・・・彼女の命を取る事だったんだね」

ククルは家に帰ると、息を切って母親に尋ねた。

「そうだよ。お前の初仕事さ」

「どうして?・・・彼女はいい娘だよ」

「死ぬ人間に、良いも悪いもないんだよ。あたしら死神は、死んだ人間の魂をあのに届けるだけさ。死に関与できるのは、それを導く悪魔と、それを救う天使だけなんだよ」

母親は涼しげな笑みを浮かべて言った。

「僕は嫌だ。アンジエはもつと生きるべきだ。死んでもいい奴なん
て他にいくらでもいるじゃないか」

ククルは初めて母親に反抗した。

「あたしら死神には、そんな事は関係ないんだよ。それとも、お前、
一生人々を苦しみから救う天使にでもなりたいのかい」

ククルは息を呑み込んだ。

彼女は続けた。

「天使なんかになったら、自分の寿命が尽きる何百年もの間、助け
た人間の苦しみを背負い続けるんだよ」

母親はククルの頭を優しく撫でながら

「お前、そうなくてもいいのかい？」

「でも、その苦しみに耐えれば、神様の側で働けるって……」
ククルは呟くように言った。

「バカだね。何百人の天使がそうやって消えると思うんだい？あそ
こで働けるのは千人に一人さ。他の天使は、人間の苦しみを背負う
事に耐え切れず、無の世界に消えて行くんだよ」

ククルの額から冷たい汗が流れていた。

天使の香り【3】

満月は欠け、弓張りの半月に姿を変えていた。

アンジェリカの病気の進行は早まっていた。

既に左腕も動かなくなり、ベッドに起き上がる事も出来ない。

「毎日来てくれて、ありがとう」

アンジェは横たわったまま、ククルに微笑みかけた。

「こんなに夜遅くに歩いて平気なの？ククルは学校に行っていないの？」

「こんな時でもアンジェは他人の心配をしまつ。

「ああ、家で勉強してるんだ」

ククルは小さく微笑んだ。

「そう」

アンジェは窓の外を眺めて

「あの月は、今度、何時満月になるのかしら」

「今、欠け出しの半月だから、あと二十日くらいかな」

ククルは静かに応えて

「アンジェは死ぬのが怖くないの？」

「怖いわ・・・でも、悲しむお父さんとお母さんの事を思うと、そ
ちの方がずっと辛いわ」

「自分以外の人の気持ち辛いなの？」

アンジェは肯く代わりに、深く瞬きをした。

「もう、満月は見れないかしら」

アンジェはそう呟いて少しだけ寂しい笑顔を浮かべた。

彼女の微笑みに、ククルは何も応えられなかった。

近くのブドウ畑から香る風が、すがすがしく町を通り抜ける、よ

く晴れた日。

その日は病室が朝から騒がしかった。

アンジェが呼吸困難に陥っていた。

呼吸補助装置を着けていたが、人力ポンプの気休めのような装置だった。

それでも、この時代には画期的な装置だった。

レオナルド・なんとかと言う人が発明したらしい。

病室には、何とか母親が駆けつけたが、父親は仕事を休む訳にはいかなかった。

例えば娘が危篤だとしても・・・

ククルは病院の直ぐ側にそびえる高い木の上からアンジェの病室を見ていた。

彼はもう家には帰れない。

その覚悟でここへ来ていたのだ。

・・・

「母さん、僕は天使になるよ」

ククルは真剣な顔で言った。

「お前、まだそんなことを・・・」

ククルの青い目を見て、母親は言葉を呑み込んだ。

その視線があまりにも真剣で迷いの無いものだったからだ。

「もう、ここへ戻っては来れないんだよ。それでもいいのかい？」

「どうせ、しばらくすれば、僕はここを出るんでしょ？」

「一人前の死神になったらね。でも、一度天使になったら、二度と私と会う事は出来ないよ」

母親はククルの、死神の子供にしては澄み切ったマリンブルーの

瞳をじつと見つめて

「それでも、行くかい？」

ククルは小さく肯いて身体の向きをかえると、家のドアを開けた。彼は一度も振り返ること無く、母親の視界から消えていった。

「あの子は人間に生まれるべきだったね……」

母親は小さく呟いた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ククルは天空に向けて両腕を高く上げ、死神としては禁断の呪文を叫んだ。

死神に生まれし者は、一度だけ天使と悪魔、どちらかの呪文を唱える権利がある。

しかし、それは、二度と故郷へ帰る事を許されない呪文だ。

人の生き死に関わる能力を身に付けると言うことは、それだけの試練を与えられると言うことなのだ。

晴天の空から落ちた稲妻が、ククルの身体を貫いた。

天使の香り【4】

アンジェの呼吸補助をやっていた看護婦が手を止めて立ちすくんでいた。

廊下で母親と話をしていた医師が不審に思い病室を覗いた。

「キミ、手を止めちゃダメじゃないか。交代がないんだ・・・」

医師はそう言って病室へ入って、看護婦の影になっていたアンジェリカを見て、思わず立ち止まった。

彼女はベッドの上で身体を起こして微笑んでいたのだ。

「アンジェ！」

それに気が付いた母親は、医師を弾き飛ばさん勢いでアンジェに駆け寄って、強く抱きしめた。

「信じられん・・・こんな事が・・・」

医師は、ただ呆然と立ち尽くすだけだった。

「お前は本当にそれでいいのだな。もう、取り消しは出来ないぞ」
ククルは、上の世界から聞こえる声に黙って頷いた。

「あの少女の身体の苦しみを全て背負うのだな」

「それでも僕は死なないんでしょ」

「ああ、そうだ。だから、なおさら苦しいのさ・・・」

上の世界の声が呟くように言った。

アンジェは呼吸が楽になり、身体が自由になる直前、身体の中を何かが通り抜けるのを感じた。

それは、上から真後ろの下にアンジェの身体を抜けていった。

一瞬の出来事だった。

アンジェはそれがククルだと直ぐに判った。

バニラの香りが全身を包んで、それは暖かく、そして爽やかだった。

「ククル・・・あなた、天使だったの？」

「今日から、天使さ」

ククルの声が聞こえた。

「じゃあ、昨日までは？」

「それは、ひみつさ」

「また、会える？」

「さあね、キミのそばに行っただとしても、多分もう気付かないよ」

「あたしにはきつと判るわ。ぜったい判る」

アンジェの身体に力が漲って、全身が熱くなった。

彼女はバニラの香りを大きくすいこんだ。

呼吸補助器を操っていた看護婦が、自発的に吸い込まれる息に驚いて手を止めたのだ。

アンジェリカはその後、元通りの元気な身体になり、再び学校へ通い卒業した。

やがて大人になった彼女は、学校で絵画の勉強を教える先生になった。

それから数年後、恋をして隣町に住む学校の先生と結婚し、元気な子供を3人産んだ。

「お母さん、いまケーキの匂いがしたよ」

末っ子のジョゼが庭から勢いよく駆けて来た。

アンジェは自分のエプロンで濡れた手を拭きながら

「ケーキ？」

「あれはバニラの匂いだよ」

長女のエルザが言った。8才になるしっかり者だ。

「なんで、お庭でバニラの匂いがするの？」

次女のクラエがアンジェのエプロンを引っ張って訊いた。

「なんでかしらね」

アンジェはちよつとだけ考えるふりをして

「お庭に天使がいたのかもね」

「天使？」

エルザが言った。

「天使はバニラの香りがするのよ。だから、バニラの香りがしたら、きつと近くで天使が見てるわ」

アンジェはそう言って子供達に微笑んだ後、庭先に出て空を見上げた。

爽やかな春の風が、穂のかにバニラの甘い香りを運んで、そして通り過ぎていった。

おしまい

.....
本編はつづく.....

【第20話】

寺澤は最後のページの挿絵をじっと見つめていた。

雪絵はその様子を少しの間眺めていたが

「さあ、お風呂に入りましょ」

「ええっ」

雪絵の言葉に、寺澤は一瞬驚いて彼女を見つめた。

「バカね。ワンちゃんでしょ」

「ははは・・・そうだよな」

寺澤は思わず、髪をかきあげた。

雪絵は思った。「天使はバニラの香り」と言うあの絵本の言葉。

そして寺澤の家に来る少女の甘い残り香。何か関係が・・・

いや、そんなはずはないだろう。ただの絵本だ。

心の中で自問自答しながら彼女は部屋を出た。

二人は、石畳の廊下を戻って、浴室の在る家の奥へと移動した。

勿論寺澤は、仔犬を抱えて。

洗面所兼脱衣所に在る洗濯機の蓋が開いていて、寺澤は何気なくチラリと目がいった。綺麗なオレンジ色のレースが一瞬目に飛び込んで来たが、何か罪悪感が沸いてすぐに視線を逸らした。

あの色具合は、彼女のものだろうか。

雪絵はあんな鮮やかな色の下着を着けるのだろうか。

寺澤は一瞬の妄想の中で、浴室のドアを開ける彼女の後ろ姿を見つめ、つい下半身に視線が行くのだった。

「押さえててよ」

雪絵はシャワーのお湯の温度加減を調整しながら言った。

「犬、洗った事あるの？」

「ない」

雪絵はさらりと応えながら、ゆっくりと仔犬の背中にお湯をかけ

た。

「大丈夫かあ」

寺澤は不安げに言った。

全体が濡れた子犬の身体は、みるみる細くなつて華奢になった。

「大丈夫よ。友達にペットトリマーの娘がいるんだから」

「それって、大丈夫な理由になるの？・・・」

寺澤は不安げに雪絵を見た。

「友達の家で、犬のシャンプーしてる所見たわよ」

彼女は、話しながらシャンプーのポンプから適量を手に取って、仔犬の背中を静かに泡立てた。

「それ、人間のシャンプーだろ？」

「あたしが使ってるのは、弱アルカリ性のシャンプーだから、確か犬とかも大丈夫よ。もう、いちいちうるさいなあ」

寺澤は、自分が両手で押さえた仔犬の体を優しくシャンプーする、彼女の細い指に感心していた。

時折、犬の体と一緒に自分の手の上を彼女の指が優しく通過して、その度に寺澤は、自分の身体の血流の速度が速まる気がした。

リンスもして、丹念にお湯で流し終わった仔犬は、タオルで拭いた後に、再び雪絵の部屋へ運んだ。

ドライヤーを使って速乾させる為だ。

「乾燥機に入ればいいんじゃない？」

寺澤が笑って冗談を言うと雪絵は

「ひどいこと言うのね。目がまわっちゃうでしょ」

「いや、そう言う問題じゃないだろ・・・」

綺麗になった仔犬の背中は、ドライヤーから出るイオンの風に煽られて、フサフサと黄金色の毛を靡かせて、犬には不自然なフローラルの香を漂わせた。

「寺澤くんは、彼女の家知っているんでしょ？」

「いや、近くまでしか・・・まあ、石神井公園の辺を探せばスグに見つかると思うけど・・・」

「じゃあさ、彼女が帰ってくる頃に、家の前に箱に入れて置いとけばいいんじゃない」

「そんな、簡単でいいのかなあ」

寺澤は、仔犬を膝の上に抱えて言った。

「犬が好きなら、きっと飼うよ。あの娘、何時も一人なんですよ。」

大丈夫、ダメだったらあたしが飼うから」

彼女は、そう言つて、「ねえ」と、最後は寺澤が膝に抱える子犬に語りかけるように頬擦りした。

「ところでさ」

寺澤は、目を細めてすまなそうに「とりあえず、明日まで預かってくれない・・・」

雪絵は笑みを浮かべて

「そう来ると思つたわ」

【第21話】

何時もより遅い時間に合わせた目覚まし時計が鳴った。

布団から身体を半分這い出して手を伸ばすが、目覚し時計のアラームを止めるボタンになかなか手が届かない。

あくまでも手探りで目覚ましを止めようとしていた成美の指が、時計の本体を柵から押し出してしまった。ベッドの横に在る柵の上から転げ落ちた目覚し時計は、床の上を転がりながら、電子音を奏でている。

成美は仕方なくベッドから這い出ると、床を這いずるようにして時計のアラームを止めた。

外からは、日曜日の石神井公園へ遊びに来た家族連れの声が、カーテンで閉ざされた窓を通り抜けて、心地よい雑音となって聞こえてくる。

昨夜、再び瀉血した為、少し貧血気味なのか十分な睡眠を取ったにも拘らず、寝起きがキツイ。

「何かしら・・・」

成美は、異様な獣臭さに気付いた。

部屋の臭いをクンクンと嗅いで、更にそのまま布団の臭いを嗅ぐ。布団も微かに臭っているが、本元ではないようだ。そして自分のパジャマの胸元を引っ張って臭いを嗅いでみた。

「うわ、何この臭い・・・」

両腕にも、ホコリっぽい獣臭さが染み付いている。

「あたし、いったい何をしたんだろう・・・」

何故だか、彼女の気持ちは不愉快では無い。ただ、どうして身体が獣臭いのかは謎のままだった。

成美はパジャマを洗濯機の中へ放り込んでスイッチを入れると、シャワーを浴びて両腕を丹念に洗い流した。

洗濯物を干そうとして外へ出ると、立ち眩むような太陽の光に、

彼女は一瞬目を細めた。

* * * * *

「ねえねえ、聞いて聞いて。昨日さあ、朝起きたら身体中が獣臭かったのよ」

月曜日、学校へ行った成美は、早速日曜日の事を友達に話した。その話を聞いた佳代と美鈴は眉をひそめた。

「何？獣臭いつて・・・」

佳代が、成美に訊き返した。

「ほら、何て言うか、こ汚い犬の臭いつての？」

「知らないよ」

佳代と美鈴が思わず爆笑した。

「あ、でも、何となく判るよ。うち、犬いるから」

笑いながら、美鈴が言った。

「だって、成美ん家、犬いないじゃん」

佳代が言い返した。

「だから、不思議なんだつてばあ」

「あんた、ふつうにヤバイつて」

佳代が、お腹を抱えるようにして笑った。

あの週末に起こった事件、あの時の悲痛な彼女は何処にもいない事に、成美は心の中で胸を撫で下ろしていた。

そんな話をしているうちに、一連の成美に起こる不可解な事件は、動物の霊にでも獲り付かれているのかもしれないと、佳代が言い出した為、学校帰りに彼女の家に行ってみようという事になった。

佳代と美鈴は、放課後、成美の家に行く為に、彼女と一緒に石神井駅で降りた。

「ねえ、本当にココでいいの」

月曜日の夕方、寺澤と雪絵の二人は会社を抜け出して、石神井公園沿いにある成美の家の前にいた。

「大丈夫だよ。昨日の夜、この辺を見て廻ったけど、安二崎なんて名前は他に無かったから」

「じゃあ、あたしは駅の方に行つて、彼女が帰ってくるのを見てくるね」

雪絵は駅の方へ向かつて歩いた。しかし、少し歩いた所で、正面から女子高生の三人連れが歩いて来た。

じゃれ合う声が辺りに響いている。

そのうちの一人に成美を見つけた雪絵は、三人組とすれ違いながら彼女を確認した。

あれが、生きた安二崎成美・・・ 寺澤の部屋に現れる彼女となんら変りは無い。むしろ、本人の方が顔色が悪いかもしれない。と雪絵は思いながら、素早く寺澤の携帯電話に連絡した。

「寺澤君、行つたよ。今行つた。でも、友達連れよ」

「えっ、友達連れ・・・ まあ、いいや。とにかく決行」

そう言つて寺澤は電話を切った。

雪絵は気になって、成美達の後を、距離を置いて追いかけた。

家の前の直線道路に成美達の三人が現れるぎりぎりのタイミングで、寺澤は安二崎邸の門から飛び出していた。

「ねえ、玄関に何かあるよ」

成美の家の門を三人で潜つた時、佳代が異変に気付いた。

「何あれ」

成美が言つた。

「何？爆弾かも・・・」

60センチ四方、高さ30センチほどのダンボール箱を見て、美

鈴が言った。

その言葉で三人は少しだけ後退りする。

三人の後をつけて来た雪絵は、安二崎邸の前を通り越して塀沿いの角まで来た。

「・・・・・・・・」

いきなり腕を引っ張られ、路地に連れ込まれた雪絵は、息が止まる思いだった。

しかしそれは寺澤だった。

「ビツクリするじゃない」

小さい声で叫んだ雪絵に、「シッ」と言つて、寺澤は人差し指を彼女の唇に当てた。

安二崎邸の塀は、一定間隔で柵状の白い格子が嵌め込んである。

内側に植木がある為少し邪魔だったが、その隙間から二人は成美達の様子を観察した。

【第22話】

「ねえ、開けてみなよ」

佳代が、成美に言った。

「う、うん・・・」

箱を見つめていた成美が佳代を見返す。

「爆弾だったらどうすんの・・・」

美鈴が心配そうな顔で呟いた。

成美はおずおずと箱に近寄り、とりあえず足の先で恐る恐る軽く蹴ってみた。

ゴズツという鈍い音を立てて、箱が少しズレ動いた。

確かに、中には何かが入っている感触だった。

「どう？」

佳代が訊いた。

「解んない・・・けっこう重いかも・・・」

その時、箱がガタガタと微かに揺れた。

「わっ・・・」

美鈴が成美に抱きついた。

「揺れたよ・・・今」

美鈴が小さく震える声で呟きながら、成美と佳代の顔を見た。

寺澤は、三人のリアクションを見て、思わず吹き出しそうになるのを必死で堪えていた。

「クククク・・・爆弾なんて、そう簡単に家の前に置かれないって・・・テレビの観過ぎだろう」

「どうするかな」

雪絵は、先行きが気になっていた。

成美達三人の間に、少しの間沈黙の時は流れ、寺澤と雪絵はその様子を静かに見守った。

その時、佳代がしゃがみ込んで、徐にダンボールのふたを一気に開けた。

成美と美鈴は抱き合いながら一瞬強く目を閉じた。

もし、爆弾だったら・・・テレビのドキュメンタリー番組で見たみたいに、手足を吹き飛ばすだけで中途半端に生かすのではなく、どうか確実に命を絶つて下さい。

成美は心の中で早口に、そう願った。

「ねえ、ねえ、かわいい爆弾だよ」

佳代が二人に言った。

二人は、恐る恐る目を開けると、揃ってダンボールを覗き込み、一斉に声をあげた。

「かわいいー！」

少し震えた仔犬は、愛くるしい瞳を潤ませて、助けを請うように鼻を鳴らして鳴いていた。

「何で・・・何で仔犬がこんな所にいるの」

成美は訳がわからずにはしゃいだ声を出して、仔犬の頭を優しく撫でた。

「ねえ、獣の臭いって、これだったんじゃないの？」

佳代が、少し冷静な口調で言った。

「でもさ、何でこの仔犬の臭いが、昨日の朝するわけ？」

美鈴も平静を取り戻した。

「んん、もう、そんなのどうでもいいから、この仔、運ぼうよ」

成美は急いで玄関の力ギを開けると、ダンボールを抱え上げた佳代と美鈴を家の中に招き入れた。

「ねえねえ、成美、この犬飼うの」

「飼うよ。当り前じゃん」

玄関を入っていく少女達の声が、閉まるドアと共にフェードアウトしていった。

「もう、行こうよ」

閉じた玄関を見つめる寺澤に、雪絵が促す。

「ああ」

寺澤も肯いて、公園の反対側に止めた社用車に乗り込むと、会社に戻る為その場を後にした。

「本当に、あの娘、寺澤君の所に来る成美ちゃんとは違うのかしら」
雪絵が助手席で呟いた。

「よく判らないけど・・・普通の人間なら部屋で消えたりしない
だろ」

寺澤は冷静な口調で言った。

夕刻の渋滞の中を、車はゆっくりと走っていた。

退社時刻が迫る慌ただしいひと時。二人はしばらく黙ったまま夕暮れの雑踏を眺めるように視線を揺らしていた。

「ねえ、今晚ひま？」

突然雪絵が言った。

【第23話】

「成美、昨日の仔犬どうした？」

朝、学校に着いた成美に、美鈴が声をかけて来た。

「今朝、散歩させて来た。めっちゃ、かわいいよ。今日の帰りにハンズで首輪と鎖買うから付き合ってね。あ、犬小屋どうしよう」

「あんた、電車で犬小屋持つて帰る気……」

傍にいた佳代がツツ込んできた。思わず三人共、吹き出すように笑った。

「あれって、ゴールデンレトリバーでしょ」

美鈴が少し得意げに言った。

「へえ、そうなんだ……じゃあ、名前はデンにしようか」

「あんた、相変わらず短絡的ね……」

佳代が笑いながら言った。

佳代と美鈴は、成美の買い物に付き合った後、結局仔犬見たさに彼女の家まで行った。

東急ハンズで仔犬用の首輪と庭に繋いでおく鎖、それと散歩用のリードを買った。ついでにドックフードの缶詰を買ったが、あまりの重さに三人で代わる代わる持つて帰った。

電車の中で、サラリーマンの足に缶詰の入ったハンズの袋がぶつかった時、嫌悪に満ちた目で睨まれたが、女子高生はそんな事では動揺しない。

「あんた、こういう重いものは近所で買いなさいよね」

駅から住宅街に続く道中で、佳代が言った。

「じゃあ、買う前に言ってよ。あたしだって、こんなにしんどいとは思わなかったし……」

「ねえねえ、西友にもドックフード売ってなかったっけ……」

美鈴が駅前の西友を、笑いながら指差して言った。

今更それに気付いた成美と佳代は、げんなりと瓜のように首をう

な垂れた。

玄関を開けると、仔犬が愛くるしくシッポを振って駆け寄ってきた。しかし、玄関に置きっぱなしにしていた靴には、犬の歯型が沢山ついていていた。

「あはははは、仕方ないよ。成美、諦めな」

買ったばかりのニューバランスのスニーカーに着いた小さな幾つもの歯型を見つめる成美に向かって、佳代が笑って言った。

買って来たばかりの、エッチが丸みを帯びた赤色の首輪を仔犬に取り付けた。少しの間、気になる様子で、しきりに首を振っていたが、スグに慣れたようだった。

早速三人は、散歩用のリードを仔犬に着けて、石神井公園内に遊びに出かけた。

公園内に遊びに来ていた子供達が、仔犬の可愛さにつられて、寄って来ては代わる代わるに頭や背中を撫でて行った。

成美はこの二日間、薬を飲んでいない。

仔犬の世話に追われているせいもあったが、薬を飲みたい衝動にまったくかられなくなったのだ。

「成美、犬どうしたんだ？」

その夜、三日ぶりに家に帰って来た父がリビングでテレビを観ていた成美に言った。

「家の前に捨てられてたの」

「捨てられてた？」

「そうよ。だから、あたしが飼うことに決めたの」

「そうか。お父さんも、お母さんも忙しいから、あてにするなよ」
「判ってるよ」

成美は、そう言い放ってリビングを後にすると、冷蔵庫から午後
の紅茶を取り出して二階の自分の部屋へ向かった。

（今までだって、あんた達をあてにした事なんかないよ・・・）

成美は二日ぶりにハルシオンとレキソタンを二錠づつ口の中に放り込んで、ベッドの上に身体を投げ出すように寝転んだ。

何時もなら、この苛立ちを打ち消す為に、足首を切っていた事だろう。しかし、何故かそんな気にはならなかった。

おそらく、明日の朝も仔犬と散歩に行きたかった為に、足に傷をつけると思うが巡らなかったのだ。

彼女は気持ちを沈めるように、深く呼吸を整えて目を閉じた。

その後、デパスを一錠、追い討ちで口へ入れた。

【第24話】

夕日に照らされた高層ビルのミラーガラスが真つ赤に輝いている。寺澤は、工場から上がって来たサンプルの整理がようやく一段落してロビーに在る自販機で缶コーヒーを買った。

「寺澤君」

雪絵が声を掛けて来た。

「成美ちゃんはある後どう？」

「うん。来ない所を見ると、犬に満足したんじゃないか」

「だといいけどね」

雪絵がそう言いながら寺澤の肩をポンツと叩いた。

寺澤はコーヒーを飲み干すと

「さて、あと一息だ」

と、倉庫に入って行った。

東京の夜空は星が見えない。街の灯が強すぎて空に乱反射する為、夜空が明るいのだ。

それでも、地球照で輝く今夜の三日月はくつきりと見えていた。

仔犬の件以来、寺澤の部屋に成美の姿は現れなかった。

いれば、いたで少々騒がしいが、全く来ないとなるとちょっぴり寂しかったりする。

「人間て、勝手だな・・・」

寺澤は一人の部屋で、フツと笑ってビールを口にした。

どうして自分の元に彼女が来たのか、もうあまり考えていなかった。

偶然車で轢きかけたのが原因だろうと思っていたのだ。

だから、もしも、違う誰かがあの時あそこを通っていたら、きっとその誰かがこんな目にあっていたのだろう。

そう考えると、何故だか、妙に可笑しくて、笑いが込み上げた。
突然玄関の呼び鈴が鳴った。

「誰だ、こんな時間に」

成美が呼び鈴を鳴らすはずも無い。

寺澤は玄関のドアまで行って、覗き窓から外を見た。

「どうしたんだ、こんな遅くに」

大学時代の友人、久美だった。

今は友人だが、以前は恋人だった女性。

「大泉の母んとこで占ってもらってたら、終電逃しちゃって」

彼女は、寺澤が了承する前に、ミニールを脱ぎ捨てるようにして玄関を上がると、彼の横を擦り抜けて、部屋のソファに身体を投げ下ろした。

「あー、疲れた」

「おいおい、勝手に上がるなよ」

「今日、泊めて」

「はあ？お前、ＩＴ企業のおっさんの彼氏がいるんだろ」

「ああ、もう別れた。だって、あいつパンストフェチで気持ち悪いんだもん」

彼女はそう言いながら立ち上がると、部屋に入った寺澤と入れ替わるように台所へ行き、服を脱ぎ始めた。

「おいおい、なに脱いでんの」

「だって、お風呂」

彼女は気だるそうにそう言って、部屋の仕切りドアを閉めた。

寺澤は大きく溜息をついて肩をすくめると、タバコに火を着けた。

久美は大学時代のバイトが嵩じて、今もキャンペンガールやコンパニオンをしている。

程よく張り出た胸に、縊れた腰と細くて長い足が彼女の自慢だ。
大学時代、何人もの男をその美貌と臍曲がりな性格で振り回し、廻りまわって寺澤の所に来たのが三年の秋。それから一年ほど真面

目に付き合つて、彼女の方から去つて行つたが、どう言う訳か、腐れ縁が続いている。

他の男達のように必死に追いかけるような素振りを見せなかった寺澤の行動が、逆に久美の気持ちを引き戻したのだ。

彼女は寺澤に会うまで、自分の美貌に全ての男が平伏すと思つていたのだ。

こんどは寺澤の携帯電話の着メロが鳴つた。

雪絵からだつた。

「もしもし、彼女が来なくなつて寂しいんじゃないかと思つてさ」

雪絵は明るい声で話す。

「はは、そんな訳ないだろ」

「寺澤君、なんか変」

雪絵がそう言つた時

「ねえ、タオル貸して、ねえ豊。ねえタオル！」

久美がバスルームの扉を開いて大きな声で呼んだ。

「何？いまの」

「あ、ああ、テレビ・・・かな？」

寺澤はクローゼットからバスタオルを出して、そそくさと久美に渡した。

「うそ」

雪絵にはそれがテレビの音で無い事は直ぐに判つた。

「ああ、そう言う事。成美ちゃんが来ないから、いくらでも女の人連れ込めるもんね」

「いや、そんなんじゃない・・・」

電話はもう切れていた。

「なんだよ」

寺澤は肩をすくめた。

「ねえ、この部屋、バニラの匂いがするわ」

風呂上りの久美が、身体にバスタオルを巻いて部屋に入っていた。

【第25話】

夕明かりの灯す空の下で、彼女は椎名町の駅を降りた。

商店街を過ぎて住宅街に入った時には、辺りは闇に包まれ、蛍光灯式の暗い街灯だけが路地を照らしていた。

暗闇の玄関先には喪中と書かれた行燈が二つ、灯を灯して浮び上っていた。

さつき三軒手前の角を曲がった時、既に線香の匂いが漂ってきて、その先が喪中である事が嫌でも判った。

成美は博明の家の前に来ていた。

昨日、たまたま池袋で会った博明と同じ学校の智香は以前何度か一緒に遊んだ事があった。

「成美じゃん。久しぶり」

彼女と遊んだのは、博明と一緒にいた時の事なので成美はあまり会いたい相手ではなかった。

だから、軽く手を上げて微笑んで、終わりにしようと思った。

ところが、智香は成美に駆け寄って来た。

「ねえ、博明とは別れたんでしょ」

成美はその言葉に少し俯いた。今更そんな話題はごめんだった。

「あいつ、死んだの知ってる」

「えっ・・・」

成美は思わず彼女の顔に向き直った。

「あいつ、女癖悪かったでしょ。それで、渋谷の何とかって有名な奴と、女の事でトラブったみたい。鉄パイプで頭殴られたらしいよ」

成美は、ただ呆然として智香の話を聞いていた。

同世代の知り合いが「死」と言うものに関係している事が、何処か現実離れしていた。自分が時々思う「死」と既に死んでしまった「死」は、明らかに違うものだった。

「でも、自業自得ってやつだね。あんたと付き合ってる間にも随分ヤツてたみたいだし。昨日葬儀だったって」

智香はその話が、まるでワイドショーで観た、知らない誰かの事のように笑って淡々と話していた。

成美は博明の家の前で立ち止まった。焼香に来ていたらしき喪服の男性が二人、家の中から出てきたのを見て、彼女はただの通行人を装う。

「本当に死んじゃったんだ……馬鹿なやつ……」

成美の瞳から涙が一粒、頬を伝った。

あんな奴に対してどうして涙が出るのか、彼女自身不思議だった。確かに女癖の悪い男であつたが、同時にただ一人、彼女にとって肌の温もりを知っている男でもあつた。

そんな男の末路を哀れんでいるのだろうか。

「鉄パイプで殴られたら、痛いんだろうな……」

彼女はそう呟きながら門の前で手を合わせると、そのまま彼の家の前から立ち去った。

* * * *

「だからさ、あれは違うんだよ。あいつが勝手に上がりこんで来たんだ」

「そう。勝手に上がり込んでお風呂入っちゃう仲なんだ」

書類を片手に雪絵は廊下を足早に歩いてエレベーターに向かい、寺澤はそれを追いかけるように話し掛けていた。

「そうじゃないって……」

二人はエレベーターに乗ったので、一端話は中断した。中には、他のオフィスの人が二人乗っていた。

「そうじゃないんだよ」

エレベーターが10階に着いて扉が開き、二人で出ると、寺澤は再び話し出した。

「まあ、いいわ。どうでも」

雪絵はそう言ってオフィスに入った。

この時点で、この話はもう出来なかった。

寺澤も小さく溜息をついて、自分のデスクに着いた。

「どうしたの、雪絵、なんか怖い顔」

営業の和美が声を掛けて来た。

「えっ、そう？」

雪絵は慌てて作り笑いを浮かべた。

「ま、あんたも年中笑顔じゃ疲れるもんね」

和美は笑って雪絵の肩を叩いた。

雪絵は何時になくむしゃくしゃしていた。寺澤とはまだ付き合い合っているとは言えない。その境界線が何処にあるかは人それぞれだが、少なくとも雪絵はそう思っている。

告白があれば、身体の関係が無くても、付き合い合っている事になるのだろう。しかし、大人になるにつれ、はっきりとした告白など期待は出来ない。

自然の流れで身体の関係になり、そこから始まるのを待つ事も少なくは無いだろう。

しかし、寺澤と雪絵は今の所そのどちらでも無いのだ。ましてや、雪絵は寺澤の事が好きなのだと言う確信も無い。

おそらく、寺澤の方も似たような気持ちかもしれない。

その日は、秋物の企画会議が押した為、会社の在るビルを出たのが10時を過ぎていた。

雪絵はまだ怒っているのか、寺澤には声も掛けずに、外まで出た。寺澤は、同じエレベーターだったが、他の社員がいたこともあり、声を掛けそびれていた。

通用口には警備員が立っていて「お疲れ様です」

と、声を掛けて来た。

雪絵は後ろに寺澤がいる事を知って、わざと足早にビルを出た。どちらにしても、同じ駅を使うのだ。

寺澤はビルを出ると、雪絵に追いつこうと足を速めた。

その時、歩道沿いに止まっていた紺色のアウディから男が出てきて雪絵の腕を掴んだ。

「ちよつと！」

雪絵は驚いて、とっさに身を引いたが、男の強い力には敵わない。男は彼女の顔にハンカチを当てると、雪絵はちょうど車の中へ倒れ込むようにグッタリと力を失った。

寺澤は、目の前の出来事に呆然とした。

とっさに何が起きたのか理解できない場合、人は立ちすくんでしまふのだ。

「拉致だ！」

寺澤の頭がようやく事態を把握した。

既に紺色のアウディは走り出そうとして、走行車線にウインカーを出している。

寺澤は辺りを見渡した。

「山下、そのバイク貸せ」

ビルの横で自分のバイクに跨ろうとしていた、後輩の山下が驚いて振り向いた。

「どうしたんすか？」

「理由は後だ。お前、電車で帰れ！」

寺澤は既にエンジンの掛かった山下のバイクに跨って、歩道から車道に飛び出した。

山下は何が何だか判らず、呆然と立ち尽くし

「先輩、メット・・・」

と呟いた。

【第26話】

紺色のアウディは既に走り出して、それでも寺澤の視界、車数台先に確認できた。

紺色は街の暗がりには溶け込み易い為、寺澤はしばしば目を凝らして追走する標的を見つめた。

ヘルメットを被る暇も無く飛び出した為、風圧が直に顔に当たる。山手通りから新目白通りへ出ると若干道路が空いていた為、アウディはスピードを上げた。

寺澤もバイクのスロットルを開ける。

久しぶりに乗る400CCのバイクは少々重く感じて、車の間を抜けるタイミングが掴み難かった。

彼が自動二輪を転がしていたのは20歳前の事だから仕方が無い。前方のタクシーを追い越して、アウディの真後ろに着いたが、リヤガラスはスモークの為、車の中の様子は判らなかった。

信号で止まった為、運転席の在る右側に回り込んで窓を強く叩いた。

少し痩せた男がTシャツ姿で運転している。

追いかけて来た寺澤に気付いた男は、慌てて車を急発進させた。

「おい！」

寺澤はそう叫んで、再びバイクをスタートさせた。

アウディは環七通りへ右折して遅い車を追い越してスピードを上げる。

寺澤のバイクは、オーバーパスの車線に合流する際、強引にトラックの前に割り込んでパッシングを浴びるが、そんな事に構ってはられない。

バイクの扱いも感を取り戻してきた寺澤は、右、左とバンクを振って車を追い越し、アウディに再び追いついた。

左側に並ぶと、ぐったりとシートにもたれる雪絵の姿が見えた。

その姿を確認しただけで寺澤はとりあえず安堵した。

前方の信号は再び赤だった。交差した路地からの車は確かに空いていた。

アウディは信号を無視して直進した。

「チッ」

ブレーキに手を掛けていた寺澤も再びアクセルを開けて直進する。自分はノーヘルだ・・・車と当たったらおそらく死ぬだろう。

寺澤の頭に恐怖が過ぎる。

左右の路地に注意を払い、それでもアクセルを開けて、赤信号を直進した。

突然サイレンの音が夜気に響きわたる。

寺澤はバイクの加速するノイズの中でも、それをはっきりと聞き取った。勿論、追いかけられているのは信号を無視したアウディと寺澤のバイクだ。彼はヘルメットも被っていない。

バックミラーを見ると、遠くで赤色灯の光が映っていた。

寺澤はパトカーに追いついて欲しかった。

これで、雪絵を無事助けられる。

しかし、アウディを逃がさない為に寺澤もバイクのスロットルを閉じる訳にはいかない。

一般車に配慮して、パトカーはなかなか追いつけないでいた。

R254、川越街道にアウディは左折する。

寺澤もそれに続きながら、ミラーを確認する。

「早く追いつけ」

後で光る赤色灯は、まだ50メートル以上は離れていた。

上板橋の交差点の信号は再び赤だった。何度目の信号無視か・・・

・

左の交差する路地からトラックが出てきていた。

「無理だ！」

寺澤はブレーキを握りながら叫んだ。

アウディはブレーキランプを点灯したまま右にハンドルを切った

が、とてもトラックをかわせるタイミングではなかった。

激しいスキール音が狂おしい叫び声のように路面に響きわたる。

トラックも慌てて急ブレーキを踏む。が、ちょうど車線を全て塞ぐ形で止まってしまった。

ドカッと、鉄とガラスとプラスチックが同時に炸裂するような激しい音と共に、アウデイのボンネットから白い煙が一瞬上がった。

寺澤のバイクは、フロントホークが命一杯沈み込んで、フロントタイヤが悲鳴を上げていた。

大型トラックのコンテナが目前に迫る景色に目を凝らして、ただフロントモリヤもブレーキの制動力を最大限に引き出す事だけを考ええた。

トラックまで、あと数十センチ。寺澤はギリギリで止まる事が出来た。

バイクを跳び降りて、潰れたアウデイに向かって走った。

「止まれ！！」

後で止まったパトカーから降りてきた警官が叫んでいた。

【第27話】

「印鑑無ければ、人差し指でいいから」

縦長の用紙に、いろいろと記入を終えた警官は、そう言って黒い朱肉を差し出した。

その朱肉を指に着けた寺澤は

「俺、人助けしたんですよ」

「気持ちには判るけど、交通違反はいかんよ。下手したらあんた、死んでたよ」

寺澤は渋々交通違反キップに拇印を押した。

アウディを運転していたＴシャツの男は、以前雪絵が交際していたカジユアルシヨップの店長だった。

雪絵に振られた男は、彼女を諦め切れなかったのだそうだ。

それだけの理由で拉致してしまうのだろうか……

寺澤には理解出来なかった。

「あの……彼女は？」

「病院に搬送されて検査した結果、全身に軽い打撲がある程度だそうだよ」

警官が言った。

寺澤は、最寄りの警察署にて事情聴取を受けていた。

アウディの男は、現行犯逮捕され病院に運ばれ、トラックの運転手に怪我はなかった。

寺澤は、雪絵が搬送された病院を警官に訊いてから

「反則金、こんなに……」と溜息を漏らした。

* * * *

「成美、最近顔色いいよね」

屋上の隅に腰掛けて、一緒にお昼を食べていた美鈴が言った。

「毎朝、早起きしてるしね」

「なに、毎朝ちゃんと犬の散歩してるの？」

美鈴は少し驚いた顔をした。

「してるよお。お陰で、立ち眩みもしなくなったし」

成美はメロンパンを口に入れながら言った。

仔犬を飼い始めてから二週間、彼女は瀉血行為をまったくしなくなつた。

自分の事だけで精一杯で、犬を飼いたいなどとは思つた事も無かつたが、実際には自分を頼ってくれる仔犬の為に、より自分を大事にするようになったのだ。

「そう言えば、佳代は？」

美鈴がちよとだけ辺りを見渡して成美に訊いた。

「何か、委員会の集まりだつて」

「へえ、何時も行かないのに」

「だから、呼び出しがかつたらしいよ」

「うっそ」

二人は、まるっきり他人事として笑つた。

この日、成美が家に帰ると、庭に在るガレージに父親のベンツも母親のボルボも停まっていた。

玄関のドアを開けて中に入ると、珍しく両親共に揃っていた。いったい何ヶ月ぶりの光景だろうか。

「お帰り、成美。おじいちゃんが亡くなったから、お葬式に行く準備をしなさい」

開口一番、祖父が亡くなつた事を伝えられた。だから両親が帰つ

ていたのだ。

三人で父親のベンツに乗り、二子玉川に在る、父の実家に向かった。成美は小学校二年生まで父親の実家である二子玉川に祖父、祖母と同居していた。

父親の本社勤務に伴い練馬に引っ越した後、母親のブティックの成功などもあって、石神井に一戸建てを設けたのだ。しかし、家が立派になった代償として、成美はいつも一人になってしまった。

その日のうちにお通夜が終わり、翌日に告別式が行われた。祖父の顔は、成美が小さい頃に記憶するそのままで、まるで時間が止まっていたようだった。

朝、葬儀が始まる前に、成美は懐かしい住宅街の中を、デンを連れて散歩した。一泊になると聞いて、一緒に連れてきたのだ。

古びた小さな公園を見つけて、ベンチに腰掛け、佳代と美鈴にメールを送っていた。

フツと、彼女は何かを思い出した。

自分が大きくなったせいで、最初は気が付かなかったが、その公園は、小さい頃に何時も母親の帰りを待っていた公園だった。

よく乗ったブランコは取り去れていて、窪んだ地面だけが面影を残している。赤や黄色に塗り分けられ、カラフルだった滑り台や小さなジャングルジムは、色褪せと錆でどす黒い塊になっていた。

午前中の涼しい風が彼女を掠めていくと、その風の一部が心の中で増幅されて何度も渦巻いて、吹き荒れるような悲壮感が沸き起った。

そんな彼女の心を見透かしたような目で、公園の端からトラジマの猫が成美をじっと見つめていた。彼女は周囲をゆっくりと見渡した。

ここで誰かに遊んでもらった記憶がある。しかし、相手の顔は全然思い出せない。

「行くよ、デン」

成美は立ち上がると、公園を出て、二区画歩いた。微かな記憶にしたがつて、その景色に導かれるように。

垣根に囲まれた大きな庭の在る家。昔は門が開けっ放しになっていたが、今は閉じられたままだ。

茶色い大きな犬がいたことを覚えていた。

成美は門の格子から庭の中を見渡した。犬がいる。彼女とデンの気配を感じた犬も首を立てて、こちらを見ていた。

しかし、当り前の事だが、その犬は既に、彼女の記憶にある犬とはほど遠い、白黒のダルメシアンだった。

「成美、こんな所で何をしているの？お葬式始まるよ」

探しに来た母親が、声を掛けてきた。

「ねえ、この先の公園であたしが何時も遊んでもらってた人って、覚えてる？」

成美は、母なら覚えているかも知れないと思い尋ねた。

「そう言えば、そんな男の子がいたわね。でも、確か、いつのまにかいなくなったのよね」

「なんて言う人？」

「さあ……」母親は少し考えて

「ああ、確か、寺澤って言ったかしら。昔は今ほど物騒じゃなかったから、名も知らない子と遊ぶ事もよくあったのよ」

母親はそう言つて、実家の方へ歩き出した。

成美もその後をついて歩いた。

告別式の後に、火葬場へ行き、祖父の亡骸はお墓に埋葬された。

中学に入ってから始ど会った記憶のない祖父だったが、火葬の釜に棺が入れられる時、成美の頬を涙が伝っていた。

三人を乗せたベンツが実家を出て、住宅街を抜ける時、あの小さな公園の横を通った。

成美は、スモークガラスの窓を全開にして公園を見つめていた。夕暮れの日差しに、誰もいない公園内の遊具が、寂しく長い影を

落としていた。

【第28話】

朝、フライパンの焼ける音と匂いで寺澤は目が覚めた。
目玉焼きの焼ける匂い。

一人暮らしにはまったく不自然な目覚めだった。
雪絵でも来たのか。いや、彼女はここの鍵は持っていない。

寺澤は目を擦りながらベッドから起き上がった。

「おはよう」

そこにはフライパンを片手に成美が笑っていた。

「おう、なんだ・・・」

寺澤は一瞬目を丸くした。

見かけでは判らないが、寺澤の部屋に入り込むのは「あの」成美だろつ。

「もう、来ないんじゃないかったのか？」

寺澤はベッドから出てテレビを点けた。

「そんな事、言ってないよ」

寺澤がコーヒーカップを取ると、

「コーヒー沸かしてあるよ」

と、成美がコーヒーメーカーを指差す。

どうした風の吹き回しだろう。

寺澤は怪訝な顔付きで成美の後ろ姿を見つめた。

「俺、会社に行くけど・・・」

寺澤は、昼間に現れた事の無い彼女へ言った。

「うん。適当に時間つぶすよ」

成美は何かのDVDをデッキに入れながら言った。

「何で、朝からいるんだ？」寺澤は、そう訊こうとしたが、何故だか言葉が出ず

「じゃあ、行つて来る」

と、家を出た。

玄関には彼女の靴がちゃんとあった。

「いつてらっしゃい」

笑顔でそう言った彼女の言葉が、一人暮らしの寺澤には少しだけくすぐったかった。

* * * *

朝から小雨が降る、ある日、成美は迷っていた。

デンが、天気などお構い無しに、朝の散歩を強請って、鳴いている。

「デン、雨降ってるよ。それでも行く？」

庭に出た成美は、しゃがみ込んで、デンに向かって話し掛けた。

デンは、既に散歩に行くものと思い、シッポを振って、散歩用のリードを着けてもらうのを心待ちにしている様子だ。

「仕方ないなあ。今日は、すぐ帰るからね」

成美は、デンの愛くるしい表情に負け、リードを着け替えた。

彼女は傘をさして、勇み足のデンに引かれるように門を出ると、家の塀沿いにしばらく歩いて、道路向こうの公園側へ渡ろうとしていた。

その時、彼女の手から、リードの取っ手がスルリとすべり抜けてしまった。デンは気付かない様子で、道路を渡り出した。

「デン、待つて」

彼女はデンのリードを捕まえようとして安全確認を怠ったまま、手を低く前方に伸ばして足を踏み出してしまった。

元々交通量の少ない通りだった為、油断したのだ。

傘が視界を狭めたせいも、あるのかもしれない。

二歩か三步目、小走りに足を踏み出した時、彼女は右側に近づく車の気配と微かな水音を感じた。

同時に車は急ブレーキを掛け、悲痛な叫びにも似た、激しいブレーキ音が住宅街に鳴り響いた。

振り向いた成美の目の前に、車はいた。

距離は既に１メートルもない。

あまりのアップでどんな車種かさえ判らなかった。

ホラー映画の惨殺シーンのような、恐怖と絶望に支配された瞬間。引き返そうとする身体の力が、飛び出した慣性と相反して、その場にクギ着けになる。

ちょうど、道路に飛び出して来たネコが、車に気付くとその場に止まって固まってしまふのと同じ現象だ。

ああ、しまった。失敗しちゃった・・・どうして・・・せっかく生きがいを見つけて、薬もリストカットもしなくなったのに・・・あたしってついてない・・・

迫り来る車を見つめて、成美は思った。

次の瞬間、ミニバンのフロントノーズが彼女の身体を弾き飛ばした。

学校給食に使うアルマイトのおぼんを、床に落とした時のような、それを大きくしたような激しい音がした。

車にぶつかり、こんな音がするんだ。意外とちゃっちい・・・

目の前の車は視界から消え、どんよりとした灰色の空から雨粒が落ちていくのが、一粒一粒見えた。

足が地面から離れているのが判った。

全てがまるで、高速撮影したフィルムをスロー再生したように見え、視界の片隅にはデンのしつとりと雨に濡れたサンドベージュの姿が一瞬映っていた。

ああ、あの仔の世話はどうしよう・・・お母さんは世話してくれるだろうか・・・

後頭部に激痛を感じて、一瞬、目の前に真っ赤な閃光が走った気がした。

その後視界は真っ暗な闇につつまれ、暗黒の世界へ呑み込まれてゆく意識に、デンの悲しい鳴き声だけが微かに聞こえていた。

【第29話】

寺澤が会社から帰宅すると、成美はベッドで眠っていた。

もう、いなくなっていると思っていた。いや、未だいると思っていたのかもしれない。だから、彼はまったく驚きはしなかった。

テーブルの上には彼女が作ったと思われる夕食がラップをかけて置いてあった。

そっと、成美の肩に触れてみる。

実体としてそこに在るのは、初めて会った時から変わらない。

穂のかにバニラの甘い匂いが漂っている。

ふと、彼はこの匂いを思い出していた。

何故、最初に感じなかったのか。

母はケーキなど焼くような人ではなかった。この香りの懐かしさはそんなものでは無い。

昔の記憶が蘇える。

・・・・・・・・

彼は小学校まで川？の二子玉川に住んでいた。古い住宅街で、外れにはこれまた古い市営団地があった。

寺澤はその市営団地で小学校生活を送った。

住宅地の一画には小さな公園があった。

彼は毎日学校帰りに通るその公園に、何時も小さな女の子一人でブランコに乗っているのを見かけた。

ある日の学校帰り、公園の前に差し掛かった時、リードを引きずったまま走って来た大きな犬が、寺澤の前を横切った。

その犬は人を襲う気など、毛頭なかった。

正面に見えた少女と一緒に遊びたくて、じゃれ付きたかっただけ

なのだろうが、少女にとってその犬の大きさと力は猛獣並だった。飛びつく犬に押し倒された少女を見て、寺澤は走った。散歩をしている姿を何度か見た覚えのあるゴールデンレトリバーだった。

「こちら、お前はデカ過ぎなんだよ」

寺澤は、レトリバーのリードを取って、強く引いた。

少女は、噛まれた訳でもなく、寧ろベロベロと舐められていたが、驚きと恐怖で泣き叫んだ。

リードを引かれたレトリバーは瞬時に少女から離れて、自分でお座りをした。多分、ある程度の躰はしてあるのだろう。

「大丈夫だよ。ほら、キミと遊びたかっただけなんだよ」

寺澤少年は、少女を抱き起こすと、笑っているような顔で舌を出しながら、大人しくお座りをしているレトリバーを見せた。

彼が犬の頭と頬を撫でると、シッポをふって気持ちよさそうな顔をする。それを見た少女は、途端に泣き止んで、レトリバーに近づいた。

その少女は何時も夕方まで一人だったので、寺澤少年は時々遊び相手をしてあげたのだ。

彼女はバニラのような甘い香りがした。

一人っ子の寺澤は、少女の甘い香りは、子供独特の匂いなのだろうと思っていた。

実際、そうだったのかもしれない。

彼の父親は早くに他界して、祖母と母親の三人暮らしだった。母親は遅くまで仕事の為、彼にとっても夕暮れの日差しは、心を切なくさせた。

公園近くの広い庭のある家に、少女に跳び付いたレトリバーは飼われていて、少女と一緒に遊びに行ったりもした。

何時も日が暮れる頃に、公園の外から、仕事帰りの母親が少女を呼ぶ声がした。

「ナル！帰ろう。何時も有難うね」

優しい母親の笑顔と、そこに駆け寄る少女の姿があった。

夕闇を背に、長い影が何処までも伸びて、他の影に吸い込まれていった

しかし、中学に入ると同時に母親が再婚した為、寺澤の家は埼玉県の入間市に引っ越してしまった。

その後の少女の事は判らず、記憶が遠のいて何時しか消えていった。

寺澤は腰掛けたソファから成美を見つめていた。

「ナル…… まさかな……」

彼女は相変わらず、リアルな寝息を立てていた。

【第30話】

光の波が幾つも連なって駆け抜けていくと、その向こうには何処か別世界に通じるような道しるべが現れる。時折、湾岸ランナー達が爆音を轟かせて、その幻想に向かってテールランプを震わせ、あつというまに消えていく。

大黒ふ頭のイルミネーションがオレンジ色に輝きながら渦を巻いているのが見える。反対側を見渡せば、横浜港周辺の明かりが水面に浮かんでいる。

夜空を仰げば、青白い弦の月が二人を見下ろしていた。

「急にドライブに行きたいなんて、どうしたんだ？」

寺澤と成美の二人は、ベイブリッジの路側帯に車を止めて、夜景を眺めていた。夜中に目を覚ました成美が突然来たいと言ったのだ。寺澤にしてみれば、夕飯のお礼と言うわけだ。

「あたし、車に跳ねられたみたい」

成美は笑って言った。

寺澤は訳が判らず呆然として「何時？」

「昨日の朝」

成美は犬の散歩中に事故に遭ったことを話した。

「だから、元に戻れなくて……」

「本人の身体に戻れないって事？」

成美が言うには、彼女の意識が完全に無い為、コントロールが出来ないそうだ。

「でもね、命には別状ないから」

寺澤は少しだけホッとすする。

「ただ……」

「なに？」

「次に戻ったら、もう出て来れないかも」

成美は少し俯いた後、欄干の手すりに身体を擡げて、空に浮かぶ月を見上げた。

月光に照らされた彼女の肌は、透き通るほどに白く澄んでいる。ここにいる成美の身体は、本体の持つ、不安、孤独、迷走が作り出した幻影なのだ。

精神が安定するにしたがって、幻影の成美は姿を現さなくなる。そして、二度と現れないという事は、安二崎成美本人にとっては喜ばしい事なのだろう。

「もともと、身体は一つ、意識も一つなんだから、仕方ないよ」

寺澤も一緒に夜空を見上げた。

「そうね」

彼女は月を見上げたまま応えた。

寺澤は小さい頃の、あの記憶の少女の事を訊こうとしたが、何となく言葉が出なかった。

無の世界から意識が立ち上がる時、真っ白な背景が少しずつ揺らいで何かの面影が見えてくる。

それは、いままで体験した記憶、思い描いていた幻想、希望。

後頭部に当たる柔らかい感触はなんだろう・・・

何かの匂いがする。花・・・種類は判らないが複数の花の匂いがする。

天国の匂いだろうか・・・いや、微かにクレゾールの匂いもある。

彼女の嗅覚が最初に目覚めた。

何も無い世界に突然香る物理的な匂いに意識が覚醒する。

「脳波も安定して異常もないので、目が覚めれば回復は早いと思います」

誰かの声が聞こえた。知らない男性の声だ。

穏やかだが、テキパキとしている。

「有難うございます」

母の声が聞こえた。

成美の意識は次第にはつきりとしてきた。ゆっくりと目を開けると、真っ白い見知らぬ天上が見えた。

蛍光灯の明かりがやけに眩しく感じて、目を細くしか開けられなかった。

「あら、目が覚めたのね」

母の顔が、上から覗き込んできた。

成美は、自分がどうしてここで寝ているのか、ここが何処なのか考えていた。身体がだるくて、まるで見えない何かで押さえ付けられているようだった。

「あんた、車に跳ねられたのよ」

母が言った。

同時に彼女も思い出していた。

「ごめんなさい・・・」

成美は反射的に呟いた。

「よかったわ、命に別状なくて」

成美は、手首の捻挫と腹部の打撲、そして頭に傷は負ったものの骨には異常無く、脳震盪の怪我で済んでいた。

「デンは?・・・」

成美は、真っ先に仔犬の事が気になった。

薄れる意識の最後に聞こえたデンの声が、今でも耳に焼き付いていた。

「近所の方が、お家に連れて来てくれたのよ。ちゃんと、庭で大人しくしてるわ」

成美はホッとして目を閉じた。

「いま、先生を呼んで来るからね」

そう言って、母親は病室を出て行った。

成美は、少しでも起き上がって周囲の様子を見ようとしたが、打撲した身体が傷むのと、頭を動かすと頭痛と眩暈がして、諦めて再び枕の上に頭を擡げた。

【第31話】

夜になると、一度、仕事に戻った母親が再び病室に現れた。
父と一緒にだった。

「おお、意識が戻ったんだってな」

父親は成美に向かって言った。

「デんに、ご飯あげて来たからね」

母親が笑顔で言った。

「お父さん、仕事は？」

「馬鹿だなあ、娘が事故に遭ったんだ。何時も通りに仕事なんかしてられるか」

「お父さん、出張先の大阪から急いで帰って来たのよ」

父親の後ろから、母が言った。

「何時も、仕事で家にいないんだから、無理しなくても平気なのに」

成美は、天上を見上げたまま応えた。

「こんな時でもない、会社に言い訳できないしな・・・」

父は笑っていた。

「じゃあ、世田谷のマンションは何？」

成美は父の顔を見上げた。

「世田谷のマンションって・・・美香のマンションの事か？」

「あたし、知ってるんだよ。お父さんが若い女と世田谷のマンションに出入りしてる事」

ついに言ってしまった・・・成美はそう思った。

「成美、あんた、美香さんはお父さんの妹さんよ」

母親が少し笑って言った。

「うそ・・・」

成美は思わず絶句した。

「成美が美香さんに会ったのは、もう随分昔なもの・・・」
母が呟いた。

「母親が違っからな……」
父は苦笑いを浮かべた。

浮気だと思っていた女性は、父の父、つまり祖父が若い時に、浮気をして出来た子供らしい。

父とはかなり年齢が離れているが、認知した為、正式に兄妹だった。

「向こうのお母さんの具合がよくなってな……」
「じゃあ、あたしが見たのは……」

父は、妹の助けになろうと、忙しい仕事の合間を縫って、彼女のマンションに出入りしていたのだ。

父親は、本社の重要なポストに着いた為、頻繁に出張があり、しかも、妹の母親の面倒も見ていた。

母親も、自分の店を見ながら父の手助けをする為、美香のマンションへ行くらしい。

美香の母親は、数年前に脳卒中を起こして、体が不自由になり、認知性も現れているそうだ。

全ては、思い過ごし……父と母は、本当に忙しい毎日を送っていたのだ。

「あたしだって、寂しいんだよ……」
成美はやりきれない気持ちで込み上げて、天上を見上げたまま、

涙を流した。

目尻から零れた涙が、耳の後を伝って枕に滴り落ちた。

「悪かったな……心配かけて……」
父親の大きな手が、成美の頭を撫でた。

何年振りかの父の手……最後に頭を撫でられたのは何時なのか、彼女は覚えていない。

「ごめんね……あたしも、もう少し、家にいられるようにするわね」

母親が、怪我の治療の為に短く切られた、成美の髪の毛を撫でた。
今まで溜め込んでいたものが一気に溢れ出るかのように、成美の
目から涙が流れ続けた。

父がお見舞いを買ってきた、ケーキを三人で食べた。

家族三人で一緒に何かを食べる事が、いつたい何時ぶりなのか、
成美は一瞬考えたが、もうそんな事はどうでも良かった。

【第31話】（後書き）

次回最終回です。

【第32話】〜エピソード

成美が寺澤の胸に飛び込むように、突然抱きついてきた。

「もう、お別れだわ」

しがみ付くような腕の力に、確かな人の温もりを感じた。

「うん……そうか」

寺澤も彼女の身体の感触を確かめるように、両腕で包み込んだ。
あんなに煙たく思ったのに、いざ別れるとなると寂しいと言うのが本心だった。

それは、恋人同士の別れとは違う。

むしろ、肉親との別れに似ているかもしれない。

「元気でね」

成美は寺澤の胸に顔を埋めたまま言った。

「キミも……つてのは変か……」

寺澤の言葉に、成美がフツと笑った。

彼女の熱い息遣いが、寺澤の胸に伝わる。

海風がベイブリッジを走り抜け、二人の髪が大きく靡いた。

寺澤の背中に回した成美の手に力が入って「ありがとう。また助けてもらったね」

彼女がそう言った瞬間、寺澤の腕の中から全ての感触は消え、何も無くなった。

確かに感じた温もりは、彼の心と身体に僅かな余韻だけを残して去って行ったのだ。

「また……」その言葉に彼は確信した。

彼女は、寺澤少年が「孤独」から救い出した少女なのだ。少女の記憶が、高校生に成長した成美から抜け出したに違いない。

寺澤は閉じていた目を見開いて、長い夢でも見ていたかのように大きく息をついた。

彼のシャツに着いた、穂のかに甘い香りが鼻孔を擦った。

ヘッドライトの光が近づいて来て路肩に寄ると、寺澤の後ろに一台の車が止まった。

若い男女が車から外へ出て来て、女性の方が

「ああ、綺麗な眺め」

そう言って、欄干の手すりに身体を寄りかける。

「なんか、甘ったるい匂いしない？」

茶髪の男が言った。

「何の匂いだろう」

「なんか、ケーキの匂いみたいだよな」

「ねえ、知ってる？天使ってバニラの香りがするんだって」

女性が言った。

「ほんとだよ」

男が笑った。

「昔、絵本でよんだもん」

そんな会話が寺澤の耳に聞こえて来た。

「バニラは天使の香り……か」

寺澤は、フツと笑って夜空を見上げた。

赤く点滅するベイブリッジの航空誘導灯の先には、さっきと何も変わらない月が、静かに彼を見下ろしていた。

「ここは、駐停車禁止です。速やかに車を移動させて下さい」

パトカーが橋の上をゆっくりと走りながら、マイクで警告を発していた。

意識が戻って二日目の夕方、成美の病室には佳代と美鈴がお見舞いに来た。

「なあんだ、意外と元気なのね」

病室に入った佳代が、第一声に言って笑った。

「髪、切られちゃったんだね」

美鈴が、成美の髪を見て言った。

「後頭部をしこたまぶつけたからね」

「痛かった」

「一瞬だけ。後は気を失ったから」

「髪はすぐに伸びるよ」

佳代が口を挟んで微笑んだ。

「ケーキ買って来たよ」

美鈴がそう言って布団の上にケーキの入った箱を置いた。

「なんか、入院していると太りそう・・・」

成美が笑うと、他の二人もつられて笑った。

開け放たれた病室の窓から流れ込む、梅雨の晴れ間に吹く暑い風が、夕暮れに冷やされて涼しくなっていた。

10日間の入院で、成美は退院した。

デンが、自分の事を忘れてはいないか、彼女は不安な思いで門を潜った。しかし、そんな心配は不要だった。

デンは大きく身体ごとシッポを振りながら、全身で成美に会う喜びを表現していた。

彼女は誰かを待つ者の気持ちをよく知っている。

昔、自分が母親の帰りを待ち続けていた頃を思い出して、彼女は心持ち大きくなったデンの体を強く抱きしめた。

* * * *

「洗濯ものは、あたしが干しとくからお母さんはもう出かけていいよ」

「悪いわね、じゃあ、行ってくるから。今夜は美香さん所に泊まるから戸締り宜しくね」

「はいはい、いってらっしゃい」

不思議なもので、納得した理由を知ってしまうと、両親が家にいない事も平気になる。

どうせ・・・ と言う言葉で全てを片付けていた自分が、今は何処にもいない。

退院してからは、父も、母も、その都度家に帰って来られない理由、帰宅が深夜になる理由を言ってくれるようになった。

成美は久しぶりに部屋の掃除をした。

床に掃除機を掛けて、本棚にダスキンモップを掛ける。

クローゼットのハンギングしている服を、春物から夏物に取り替えていく。

梅雨明けには、まだしばらくかかると朝の天気予報で言っていたが、今日も空は青々と晴れ渡り、夏の日差しにレースの白いカーテンはハレーションを起こして模様を消している。

彼女は机の二段目の引出しを開けて、種類ごとにきれいに分類されたたくさんの薬を眺めていた。

成美は何かを決意したように、キツと口を強く結ぶと、引出しの中の薬をまとめて驚づかみにして、一気にゴミ箱へ投げ捨てた。

【エピローグ】

夏空が広がっていた。

張り出した高気圧に押し出された梅雨前線は、太平洋へ消えていた。

サンシャインビルの向こうには、入道雲が大きく立ち昇っている。今日は学校が終業式なのか、早い時間に高校生の姿を大勢見かけ

る。

「タバコ吸わないでね」

窓を開けてタバコを啜えた寺澤に雪絵が言った。

彼は渋々と一度啜えたタバコをBOXに戻した。

寺澤と雪絵は、秋冬物の商品を作る工場の下見に朝一で行って来たのだ。

「ハンズで買い物がある」と言う雪絵の要望で、池袋駅の前を通っていた。

パルコの前の大きな交差点の信号で、車は止まっていた。

「あつ」

寺澤は思わず声をあげた。

雪絵がその声に反応して、寺澤の視線を追うと、横断歩道を友人達と楽しげに歩く、安二崎成美の姿があった。

それは、寺澤を知らない成美だった。

いや、もし、小さい頃出会っている少女が本当に成美だったとしたら、まったく知らない相手ではないのかも知れない。しかし、それは何百ページあるか知れない長い人生の内のほんの1ページに過ぎないのだ。

そして、バニラの香りを漂わせて彼の前に現れた彼女も・・・成美は横断歩道でチラリと車内の寺澤を見たが、そのまま車の前を通り過ぎて歩道を歩いて行った。

寺澤はサイドミラーに映る成美の後ろ姿を見つめた。

「青だよ。信号」雪絵が言った。

「あ、ああ」

寺澤は社用車のアクセルを踏み込んだ。

「気になる？」

雪絵は少しだけ、悪戯な笑顔で寺澤に声を掛けた。

「別に」

バックミラーに映る成美の後ろ姿は次第に小さくなって、駅の構内へと消えていった。

バ
ー
ラ
E
N
D

【第32話】〜エピローグ（後書き）

少しでも、とびとびでも、読んでくれた方々に大変感謝いたします。場面変化のカット割が多いので少し読み難いかもしれませんね。この物語は二人の主人公が平行線を辿って話が進んでいます。その橋渡し役が、寺澤の部屋に現れる成美なのです。寺澤豊の前に現れた成美は天使だったのでしょうか。おそらく安二崎成美の守護天使です。「守護天使って何？」って、つまり、日本で言う、守護霊ですかね。じゃあ、守護霊でいいじゃんって感じですが、なんか守護天使の方がメルヘンチックじゃないですか。守護霊っていうと、バラの香りよりも線香の香りがしそうじゃないですか……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1189b/>

バニラ

2010年10月8日15時02分発行